

令和 2 年度 宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査時の採集品

はじめに

本稿で報告する内容は、宇和奈辺陵墓参考地（以下、当参考地）で令和 2 年実施の事前調査に合わせた周濠の落水時に、墳丘裾部のうち陵墓地内で確認された採集品についてである。また、当該調査については、トレンチ内での遺構・遺物を中心に本誌第 74 号〔陵墓篇〕に報告したところである⁽¹⁾。

令和 2 年の調査は、当庁が墳丘部にトレンチを設定して事前調査を行ったほか、並行して奈良県立橿原考古学研究所、奈良市埋蔵文化財調査センターもトレンチを設定して調査を行った⁽²⁾。特に、奈良市ではトレンチでの調査のほか、墳丘上から陵墓地境界線の外側に転落した資料についても丹念に採集を行っており、その整理結果が報告されている⁽³⁾。このような状況から、本報告で掲載する採集品は、既に奈良市により報告されている採集品⁽⁴⁾や当庁で昭和 61 年に採集して本誌 57 号⁽⁵⁾に報告しているものと同一個体の可能性のあるものも含まれているといえる。

なお、当庁採集品はもちろんのこと、その性格上、トレンチ内出土の埴輪と比較して、埴輪列内の厳密な位置について現時点では明らかにし得ないが、すべてが崩落せず一部が原位置に残っている個体については、今後の調査によって将来的に接合関係や製作痕跡の特徴などから位置が明らかになるものも含まれていると考えられる。

（清喜裕二・田中詢弥）

1. 採集作業と整理に関わる概要

（1）現地調査

範 囲（第 20 図） 墳丘裾の大半の範囲から採集されているが、粗密がある。多くの破片が採集された範囲は、前方部両側面であり、全体的に後円部では少なく、特に北側～東側では採集されていない。

採集の方法 まず墳丘裾を何度か巡回して、破片の転落状況についての傾向を把握した。後円部の北側～東側には破片が確認されなかったことから、採集は東側くびれ部を起点として時計回りに行った。当参考地は、墳丘裾に陵墓地の境界線が巡ることから、採集にあたっては、基本的に 2 点の境界石標間を 1 区画として取り上げることとした。しかし、後円部や造出付近は湾曲部、屈曲部が多いため、境界石標が近くに設置されているが、前方部は直線で構成されるため、石標間が長大である。そこで、前方部前面と両側面の三つの区画については、その間に取上げ用の新たな杭をそれぞれ 2 点設定して、その位置は前年度作成した航空レーザ測量図に組み込んだ（第 20 図内の境界線上に付した×印）。これにより、墳丘裾に 26 の区画が設定されることとなった（第 20 図①～②⑥）。加えて、事前の状況把握から、破片が散乱した状況にあっても埴輪列の中での位置をある程度反映しているものも多いと考えられたため、区画内での詳細な位置関係が把握できるよう記録する必要がある。この点については、境界石標や取上げ用に新たに設置した杭を利用して平板測量を行い、一定のまとまりのある破片群について位置を記録した後に 1 袋として取り上げ、破片数が多い場合は連番で関連付けつつ採集作業を行った。

設定した区画内で採集品がなかったのは⑤、②⑦～②⑥の 8 区画分である。特に②⑦～②⑥は後円部の北側から東側の範囲に該当するが、この範囲は堆積土が厚く、濠水の落水時にもっとも早く陸地化する範囲とその周辺であり、濠水の波浪による墳丘斜面の崩落が進みにくい環境にあることが要因として考えられる。実際に、第 3 トレンチでは、墳丘第 1 段テラス面と第 1 段斜面の接続部と考えられる位置に第 1 段斜面葺石の天端石と推定される石列が確認されている。それ以外の区画からは粗密はあるものの何らかの遺物が採集された。

（清喜）

（2）整理作業

点 数 整理前の破片の状態で約 3,600 点である。それらについて整理作業を行い、接合関係の確認や製

作痕跡の観察を通して、個体識別できた破片、接合してある程度の形をなしたものを中心に620点を抽出して、作図を行った。

内 訳 【埴輪】もっとも多く出土している。円筒埴輪が大半を占めていると考えられるが、口縁部の破片は比較的少ないように思われる。また、朝顔形埴輪の破片も目に付く。朝顔形埴輪は口縁部や肩部付近の破片かその部分での調整痕の共通性などが把握できないと胴部や底部だけの破片では朝顔形埴輪と円筒埴輪の区別は難しい。また、当参考地は鱗付の埴輪が中心であるが形象埴輪は僅少で、今回の採集品の中では1点の確認にとどまる。

【土器・須恵器】墳丘西側の造出で少量採集されている。土師器の高坏と考えられる破片1点のほか、須恵器の破片1点を確認している。土師器については細片のため、今回は須恵器の破片について掲載した。なお、他の場所では平成25年に前方部東南隅で無蓋高坏を採集している⁽⁶⁾。

計測図 今回の計測図（実測図）は、レーザによる三次元計測のデータをもとに二次元データとして作図したものである。内外面の見通し図と断面図について作成して、今回は成果品をそのまま掲載している。計測時には、それぞれの破片は、ガラス面上に形状に沿って安定する状態で置かれるだけであり、特段の設定は行っていない。そのため、多くの破片は平置き状態での計測となり、図面の提示も本来の傾きがわからないものについては、平置き状態で計測した後に若干の角度調整を行った状態で作図したものを掲載している。一方で、例えば大きな朝顔形埴輪の口縁部の破片などは、破片本来の角度がわかるため、そのような場合は通常の実測図の表現形態に変換して作図を行っている。

また、接合関係は把握されるものの接着剤だけでは接合が維持できないものもあったため、そのようなものについては、破片を別々に計測した後に、データ上で各破片の結合を行い作図したものもある。

三次元計測図は、外部発注として株式会社ラング（岩手県盛岡市）に依頼した。作業途中では、計測の特性などの説明を受けつつ、表現方法などについて意見交換を行いながら進めた。成果品は、同社で作成するPEAKIT画像として納品されたものである。掲載にあたっては、納品された画像データに若干の強調を加えたうえで使用している。

掲載の方針 計測を行ったすべての破片を掲載することは困難であるため、本報告においては、まずできる限り多くの計測図を提示することを第1の目的とした。埴輪については器種や部位の違いを勘案しつつ、その中である程度大きな破片や接合により大きな破片になったものを中心としたほか、特徴的な製作技術上の痕跡がみられるものなどを選択した。特に、底部の破片は最後まで地中に埋まっていたため、比較的大きなものの点数が多いことと、良好な残存状態のものが多かった。そのため他の破片よりも、多くの情報が得られることが期待されるため、重点的に掲載している。また、破片としては小型・単独でも周辺に同一個体と考えられる破片がない場合も、できる限り提示するようにした。

なお、今回の採集品の中には完形に復元できるものはなかった。（清喜・田中）

2. 採集品について

（1）所 見

整理を行う過程で、完形での復元はできないものの、同一個体と認識でき、ある程度部位の破片が確認できるものもあったが、個体数としては少ないため、本報告では便宜的に各部位や特徴に分けて掲載することとした（第21図～第50図）。実測図を作成した620点のうち、挿図に掲載したものは183点である。

掲載資料をどの区画で採集したかは、第20図に示した丸印の区画番号の横に挿図番号を記載し、枠で囲って示した。区画によって掲載点数に差があるが、これは、その場所が埴輪列の崩落が比較的近年に起こったと考えられることにより、当初から採集点数に差があったことや、破片が目につきやすく、かつ濠水の波浪にさらされる期間が短いことで、表面が良好な状態を保っている破片が多いことによる。よって、結果的に抽出対象となる破片が多くなったということであり、本来的な埴輪配列と関係があるわけではない。

以下に、各部位についての所見を簡単に記述していきたい。

円筒埴輪口縁部（第21・22図 図版25）

円筒埴輪の口縁部は全体的に小さい破片が多く、摩滅が顕著なものも少なくない。当参考地の埴輪は鱗付円筒埴輪が主体となることが、これまでの調査で知られているが、今回の採集品の中にも鱗が剝離した痕跡のみられる破片がある（2、3、9、13、25）。断面形態は、端部を直角に外側へ強く屈曲させるものが主体を占めるが、緩やかな屈曲にとどまるものや（2、5）、わずかに外反しつつ立ち上がり、屈曲部をもたないものがあるほか（4、9）、貼付口縁のものもみられる（3、24、25）。突帯間隔は、最上段の突帯下部から口縁端部までで5～8 cmの間で計測できる。計測できたものの中では、7 cmが多い傾向にある。透孔は、端部直下に小三角形（6、18、25）、一段下に長方形（5、24）がみられる。調整は、外面が最終的にヨコハケ調整となるものが多くを占めるが、タテハケのものもみられる（30）。工具の静止痕間隔は4～5 cmで確認できるものがあるが（3、5）、摩滅や破片が小さいことなどから不明瞭なものも多い。内面はヨコハケ、タテハケ調整のほか指ナデ調整も目立つ。色調は、橙白色や明褐色のものが多く、部位にかかわらず主体的な色調といえるが、特に硬質の24、25は赤褐色や暗灰色を呈し、目を引く特徴をもっている。

円筒底部（第23～40図 図版26～30）

埴輪底部の破片をまとめた。底部だけでは朝顔形埴輪の円筒部かどうか判別できないため、便宜的に円筒底部と表記している。

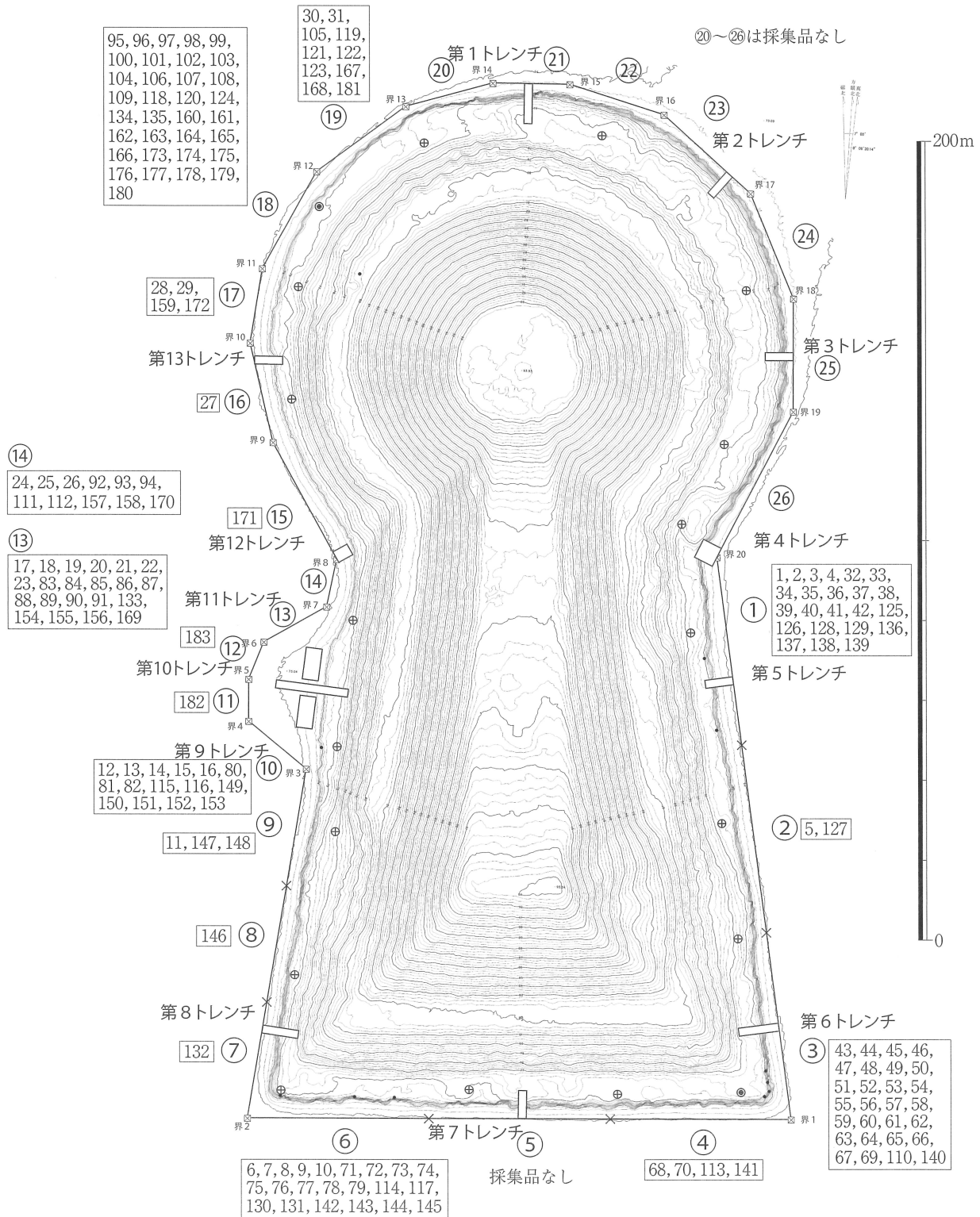
断面形態は、おおむねきれいに立ち上がるものが多い。底部高は、9 cmから14 cmの範囲に分布する。計測すると一応1 cmごとの数字でグループができるが、個体識別の上ではなく、破片を機械的に計測しているため、同一個体の破片を重複して数えている可能性もあるので、もとより各グループでの数字が当参考地の埴輪底部高の傾向を示しているものではない。参考に挙げておくと、もっとも低い9 cmが少数存在するほか、10、12、13 cmが比較的大きなまとまりを示し、11 cmと14 cmはやや少ないことになる。いずれにしても、底部高の違いは明らかに存在することから、10～13 cm間の区分の検討が次の課題となろう。透孔は第2段に確認され、99で半円形が知られるほかは、円形のみとなっている。調整は、外面が最終的にヨコハケ調整となるものが多くを占めるが、指ナデのもの（68）やタテハケのものもみられる（101）。工具の静止痕間隔は2～5 cmで確認できるものが多くみられるが、静止痕と静止痕のはっきりしないヨコハケが混在しているようなものもみられる（89、92）。また、長く波浪の影響を受けたためか摩滅が顕著なものも少なくない。内面はヨコハケ、タテハケ調整のほか指ナデ調整もかなり目立つ。色調は、橙白色や明褐色のものが多く、主体的な色調といえる。特に硬質の92は赤褐色や暗灰色を呈し、同様の破片とともに目を引く特徴をもっている。

朝顔形埴輪口縁部（第41～43図 図版31・32）

ここでは確実に朝顔形埴輪の特徴をもつものを挙げた。便宜的に口縁部としているが肩部を含む。口縁部は2次口縁の破片が多く、断面形態は、2次口縁が直線的に開いていくものが比較的多いようであるが、湾曲の顕著なものもある（110、122）。調整は、内外面ともにハケメ調整を基本とするが、外面を指ナデで仕上げたもの（110）や内面に指ナデを多用するものもある（119、120、121）。肩部は、口縁部と同様に外面はハケメ調整を主体としているが、最終的に指ナデで仕上げるものがある（118）。内面は基本的にハケメ調整を行いつつも、指ナデ調整での仕上げを基本としている。色調は、橙白色や明褐色のものが多く、主体的な色調といえる。硬質の114、117や123は赤褐色や暗灰色を呈している。

円筒胴部（第44・45図 図版33・34）

埴輪胴部の破片である。底部と同様に朝顔形埴輪の特徴が認められないと、円筒埴輪胴部との判別は難しい部分があるため、便宜的に円筒胴部と表記した。突帯間隔は掲載したものについては11～12 cmである。132は7 cmと間隔が狭いが、これは朝顔形埴輪の肩部直下の段であり、小三角形透孔があり、鱗に近い部位であろう。その他の透孔は掲載分で円形が多く、未掲載のものに長方形透孔はあるが、全体としても少ない。調整は、底部の様相と基本的に同じである。外面は最終的にヨコハケ調整で仕上げられ、静止痕が明瞭なものが多いが、一部に明瞭なピッチを刻まないものも含まれる（125、126、135）。内面はハケメ調整で仕



上げられるもののほか、指ナデ調整で仕上げられるものも多い。内面調整では、134のように板押圧の痕跡が明瞭に残る破片が複数あり注意される。

鱗（第46～48図 図版35）

鱗の破片も多く採集されている。幅は6～9cmほどの間に分布するが、6～7cm程度のものが多いようである。厚さは1～2.5cmである。平面形は、146、148、150、159のように口縁部の高さで上端部が水平に伸び、おおむね同じ幅で長方形の板として下方に伸びる。下端部は2条目の突帯で胴部に収束するが、その時水平に取りつくのではなく、斜め下方に屈曲しながら胴部に取りつく。その時の角度は浅いもの（149、154、161、163）と深いもの（140、144、156、162、164、167）に大別される。また、下端部は直線的に取りつくものと湾曲しながら取りつく違いもある。なお、上端も水平ではなく、若干上方に突出気味に伸びるものもある（160、165）。これらの特徴は、既出資料の中にみられるものであろう。調整は、ハケメ調整で上げられているものと指ナデ調整のものがある。指ナデ調整は、指ナデの痕跡が顕著なものと比較的平滑に仕上げられているものもあり、他の部位の類似する調整痕との共通点とみることができるとも考えられる。

また、鱗の接合方法については、9にみられるように、埴輪本体の接合面に2本の沈線を施すものと、126や128のようにやや乱雑に複数本の沈線を施すものとが確認される。

線刻のある埴輪（第49図 図版36-1）

ここでは器種ではなく、線刻のある破片ということでまとめた。破片は比較的小さいものが多いため、線刻の残存も部分的であり、具体的に何を描いたものか不明なものが多い。174の縦の2本線などは、先述した鱗の接合のための沈線である可能性も考慮される。172については、令和2年の当庁事前調査の第1トレンチ埴輪列 No. 8の個体で、同様の3本の鉤手状の線刻が確認されており、関連が注意される。

円筒埴輪と朝顔形埴輪の区別は、181が幅の狭い突帯間隔と小三角形透孔、及び残存部上端が肩部に続くことから朝顔形埴輪と判別できるが、その他についてははっきりしない。朝顔形埴輪の線刻については、令和2年の当庁事前調査の第7トレンチ No. 1-2の肩部に巴形銅器を描いたような線刻が確認されている。

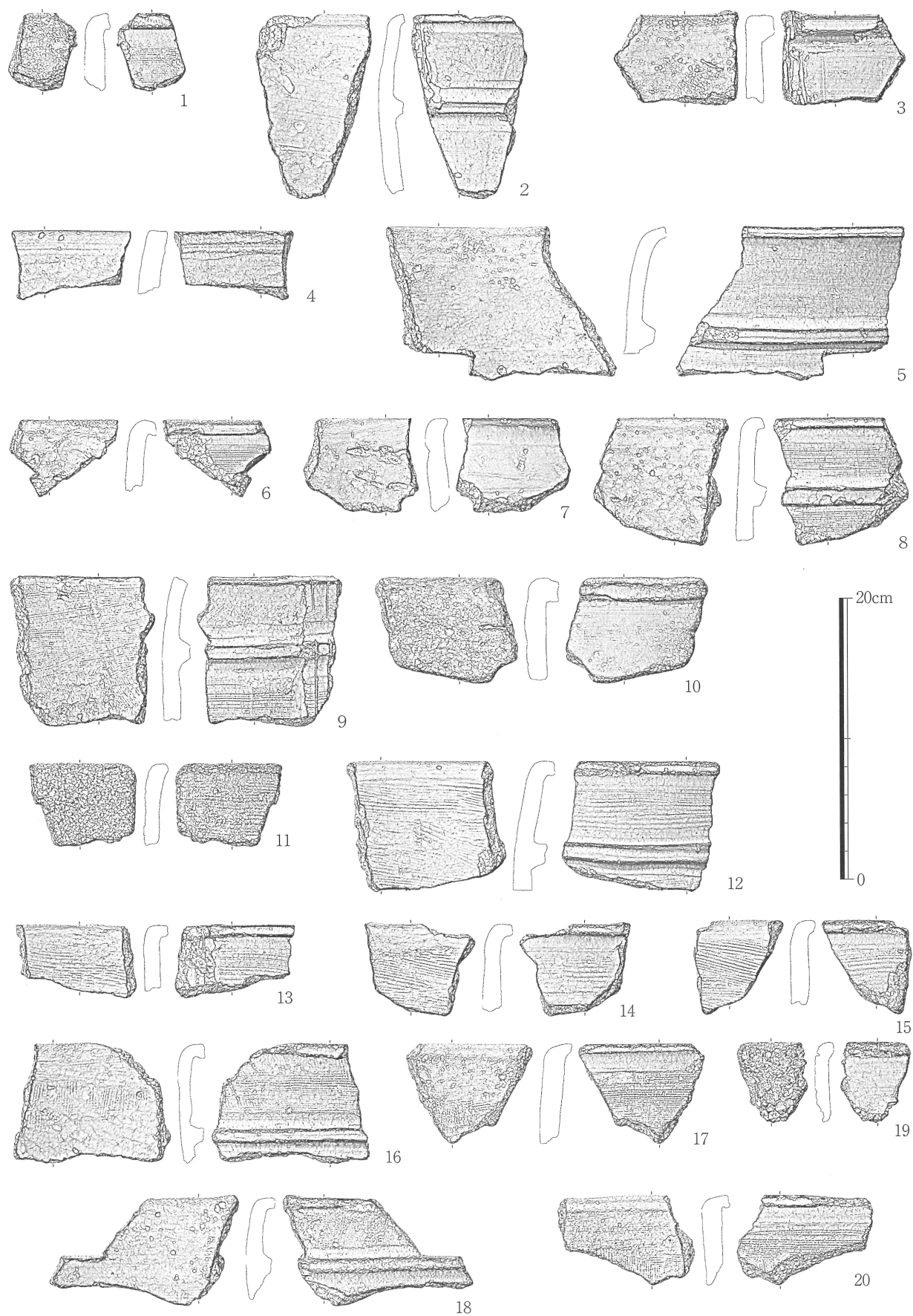
なお、多くの線刻は描いたものが不明であるが、178の破片の上端部には右方向への矢印状の線刻がある。上方は欠損するが矢印状線刻の下方に弧線と直線の組み合わせがあり、これは上方に折り返すことができると考えられ、本来的には縦に細長い半円形の線刻と推測される。これは、弓と弦を表現していると考えられ、先述の矢印状線刻が矢を表していると考えれば、弓矢による射撃の状態を表現していると考えられ、狩猟の場面を描いている可能性を指摘できよう。

形象埴輪・須恵器（第50図 図版36-2）

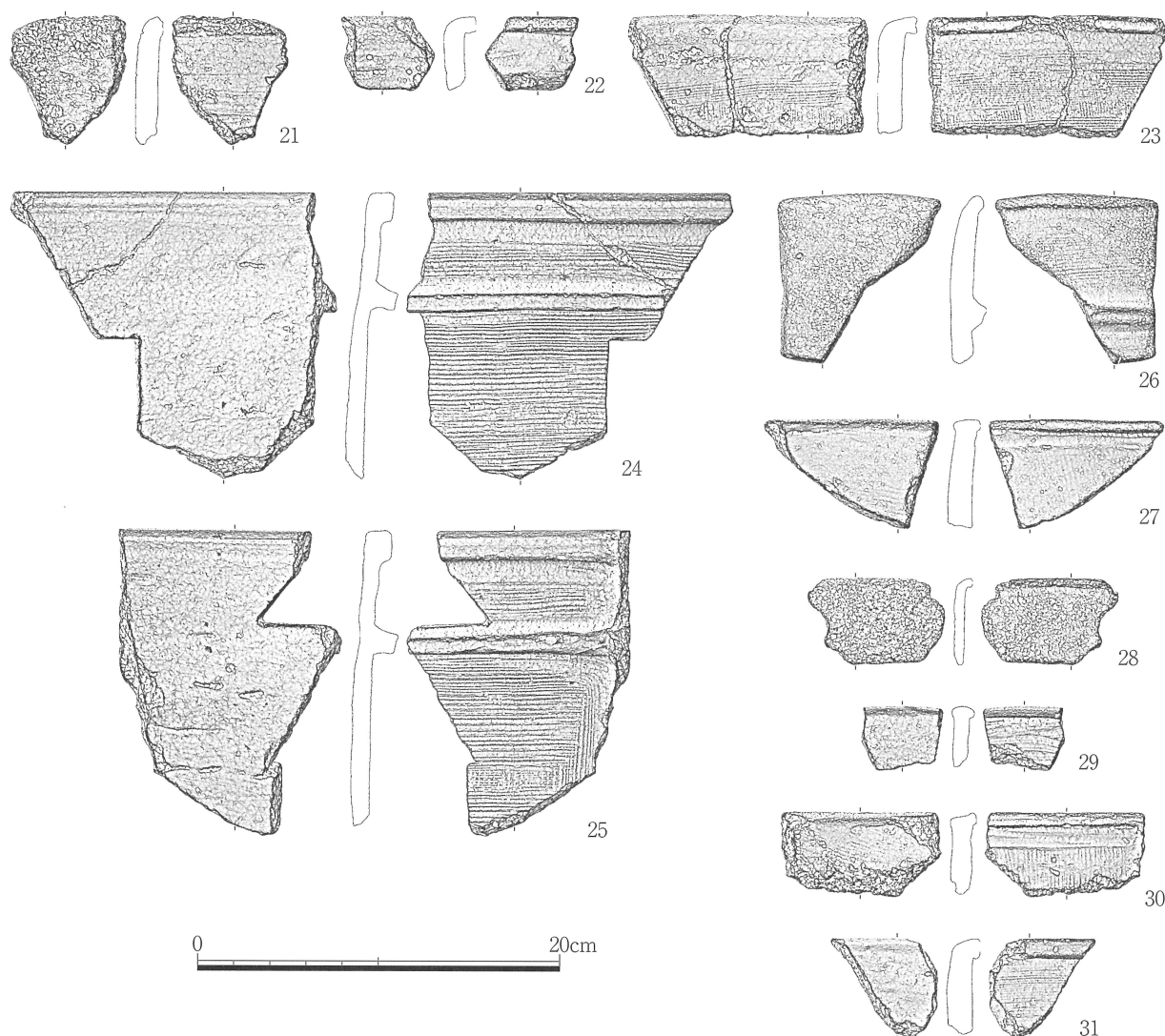
形象埴輪は1点のみ確認されている（182）。約2cmの幅で接合用の刻みがみられることから、別の粘土帯を貼り付けていたと考えられる。家形埴輪の一部と考えられよう。183は須恵器で、高坏の脚端部であろうか。波状文が施されており、採集箇所が造出であることから、既出資料で知られるものの範疇に収まるものである。

（2）分布の傾向

あくまで採集品であるため、現状で配列の傾向を推測することは難しい。隣あって配列された埴輪が同じ器種で同じ製作痕跡をもっている可能性があり、接合関係が把握できなければ、個体間はもちろん個体内でも墳丘から転落した段階で混じりあったものを、現段階で峻別するのは難しいと考えられる。また、同一個体でも部位によって製作痕跡に違いが生じることも考えられるため、実態はさらに複雑であることが想定される。個体識別を行い、ある程度の採集品の位置関係が整理できれば、配列の厳密な位置関係の追求は難しくとも、一定の範囲内にどのような特徴の埴輪があったかについては、推測できるようになる可能性がある。一例としては、32～35の円筒底部破片4点は、ハケメやその他の特徴から同一個体、もしくは同一製作者による別個体の可能性が考えられるが、透孔や底部高などから32・33と34・35がそれぞれ同一個体で、この2個体は同一製作者の手になるものと考えることができそうである。さらに、採集箇所も近接するため、築造時の埴輪配列にあたって近い位置にあったことが推測される。このような作業の積み上げが引き続き必



第 21 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (1) 円筒埴輪口縁部 1 (1/4)



第22図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(2) 円筒埴輪口縁部2(1/4)

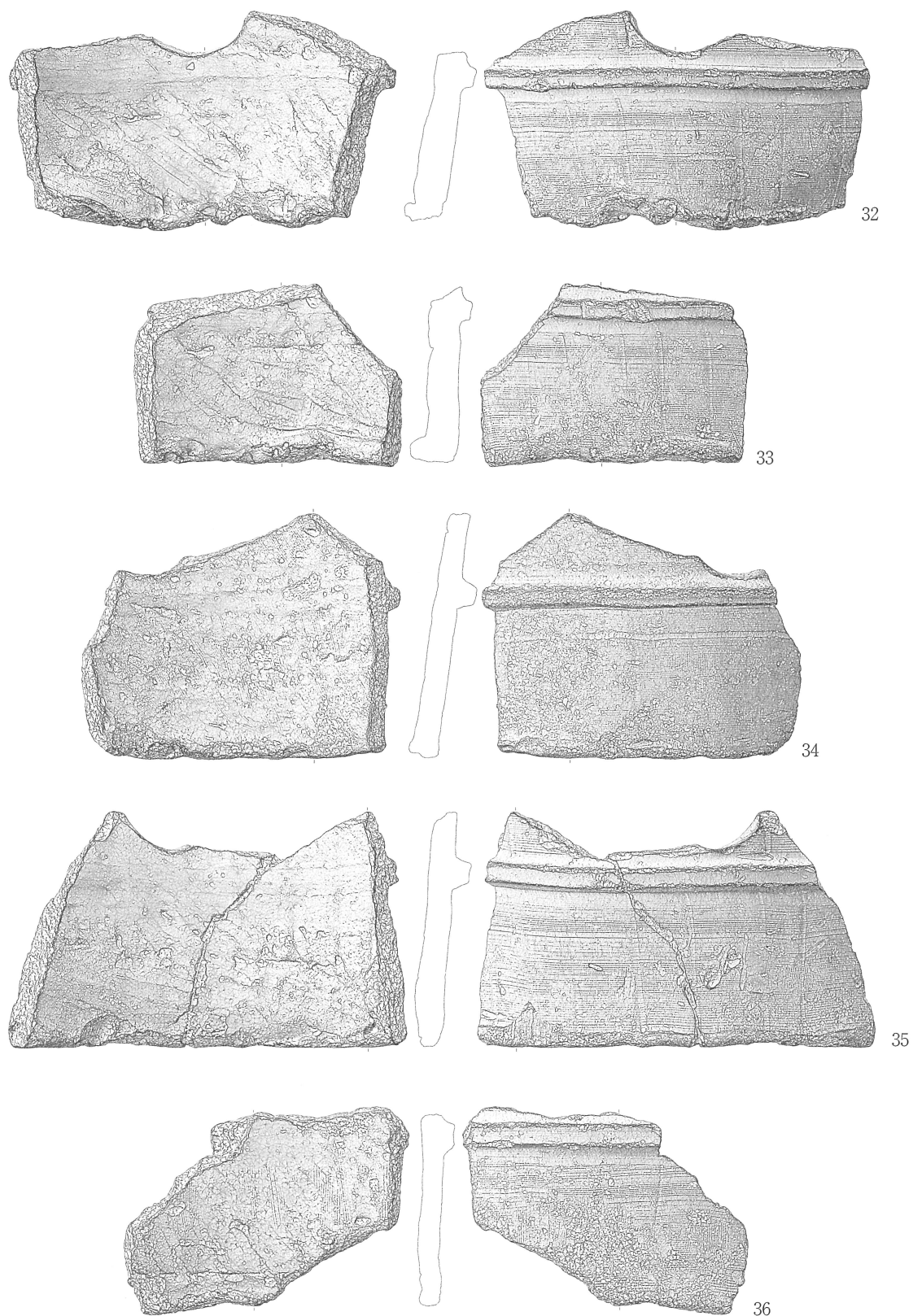
要であろう。

また、線刻のある埴輪は、13点を確認したが、いずれも採集区画⑬～⑰の間となっており、これは西側くびれ部から口縁部西側にかけての範囲である。一見線刻のある埴輪の採集範囲が限定されているようにもみえるが、先述のとおり事前調査のトレンチ内の埴輪列からも線刻のある埴輪が複数確認されており、このことから線刻を施した埴輪の個体数がそれなりの数にのぼることの反映と捉えられそうである。

まとめ

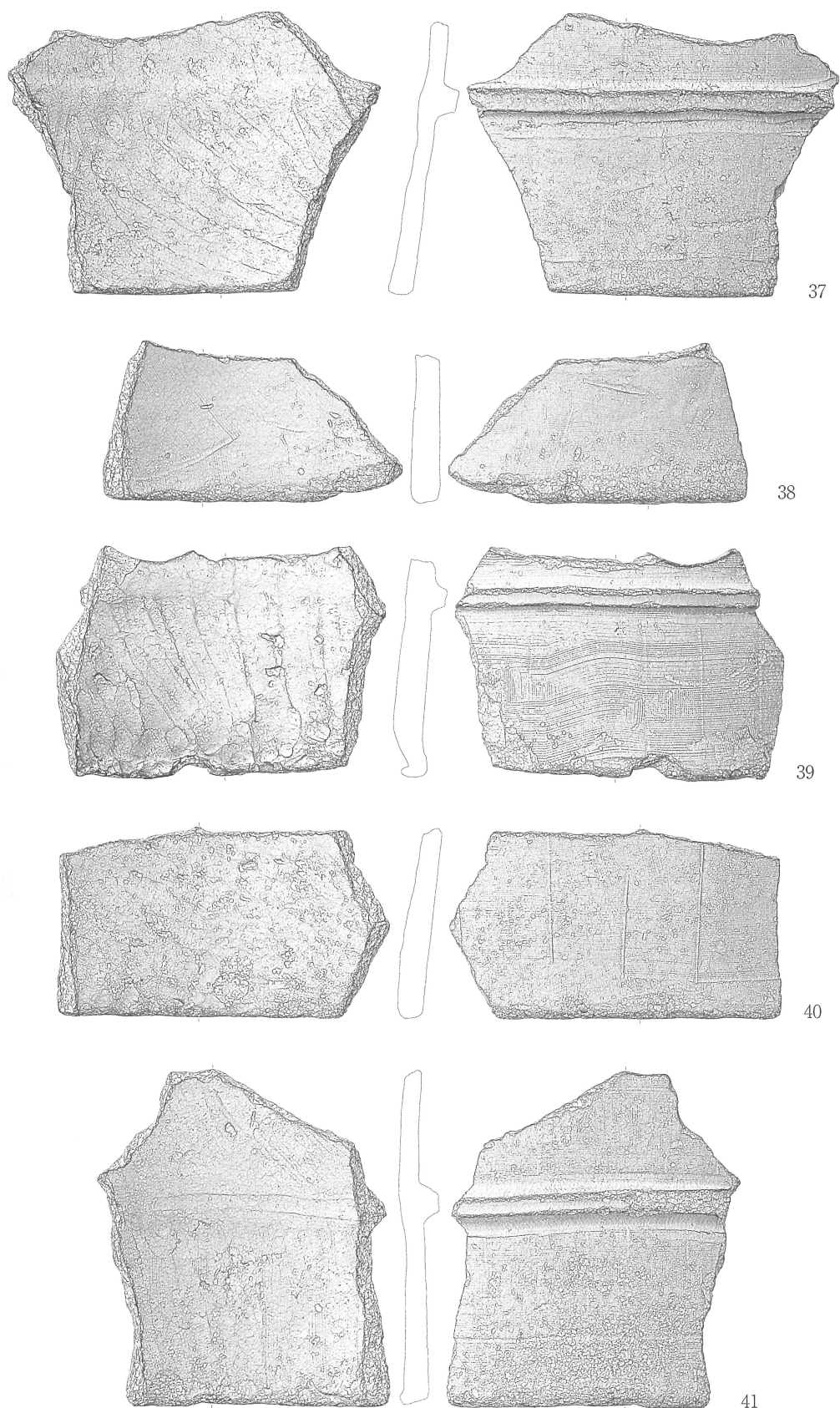
本報告は、令和2年に実施した事前調査の一環として行った現地作業の成果の一部である。事前調査の報告とあまり離れない時期でまとめることを目指したが、資料の提示のみにとどまった部分が多い。その中でも、比較的残存状態が良好である底部の破片を中心に掲載し、既出資料に数量的にも新たな情報を加えることができたと考えられる。採集した埴輪の特徴は、これまで知られているものとおおむね変わるところはないといってよいと思われ、形態、調整、色調など既出資料との対照においても重なるところが多いといえる。

また、本報告では、試みとしてレーザによる三次元計測データをもとに二次元データとしての実測図作成を行った。微細な形状も記録できるため、成果品としての画像データでは、ハケメをはじめ多くの情報が得られることを実感したが、印刷物としての報告では縮小せざるを得ず、また印刷との兼ね合いで画像データの

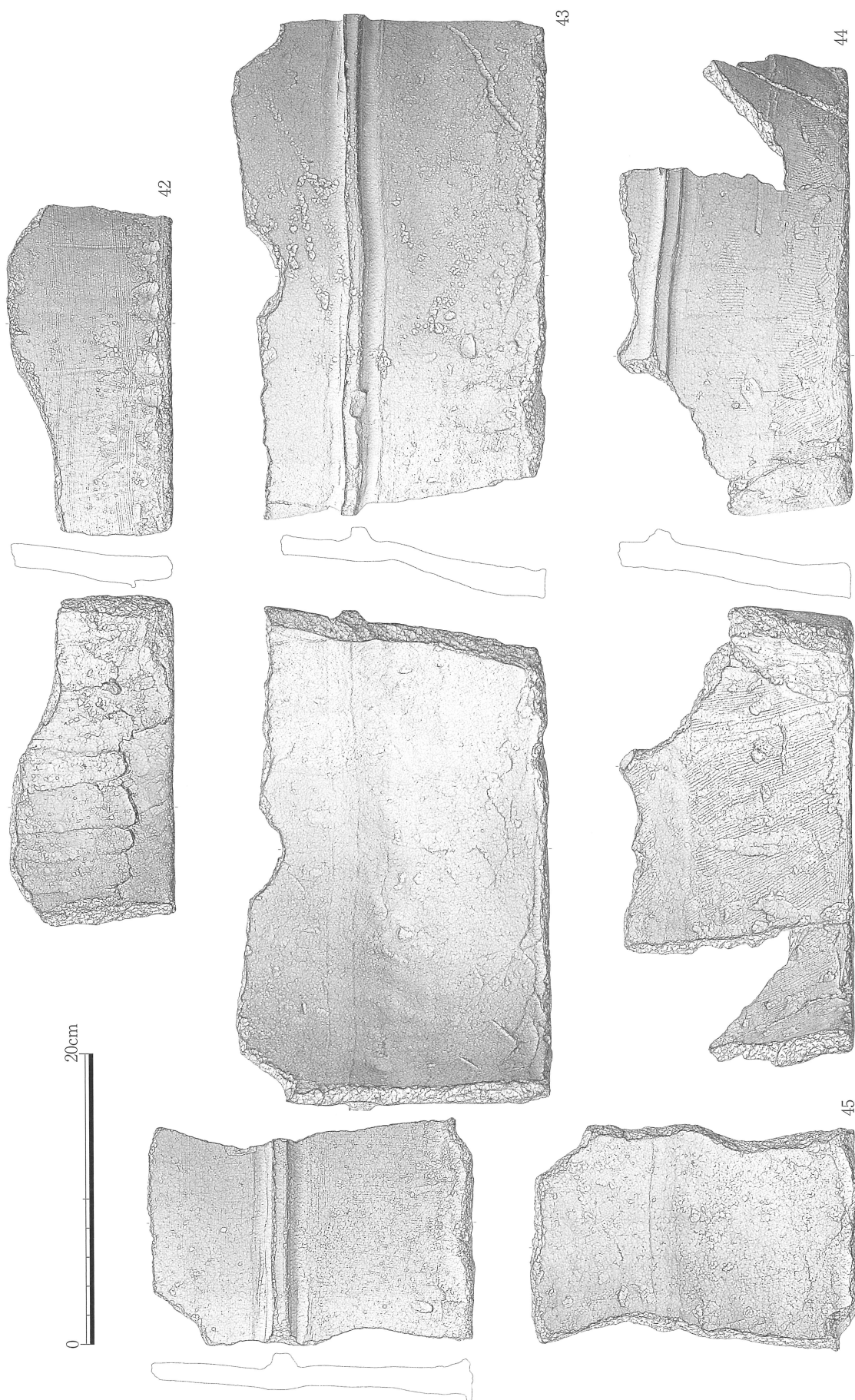


0 20cm

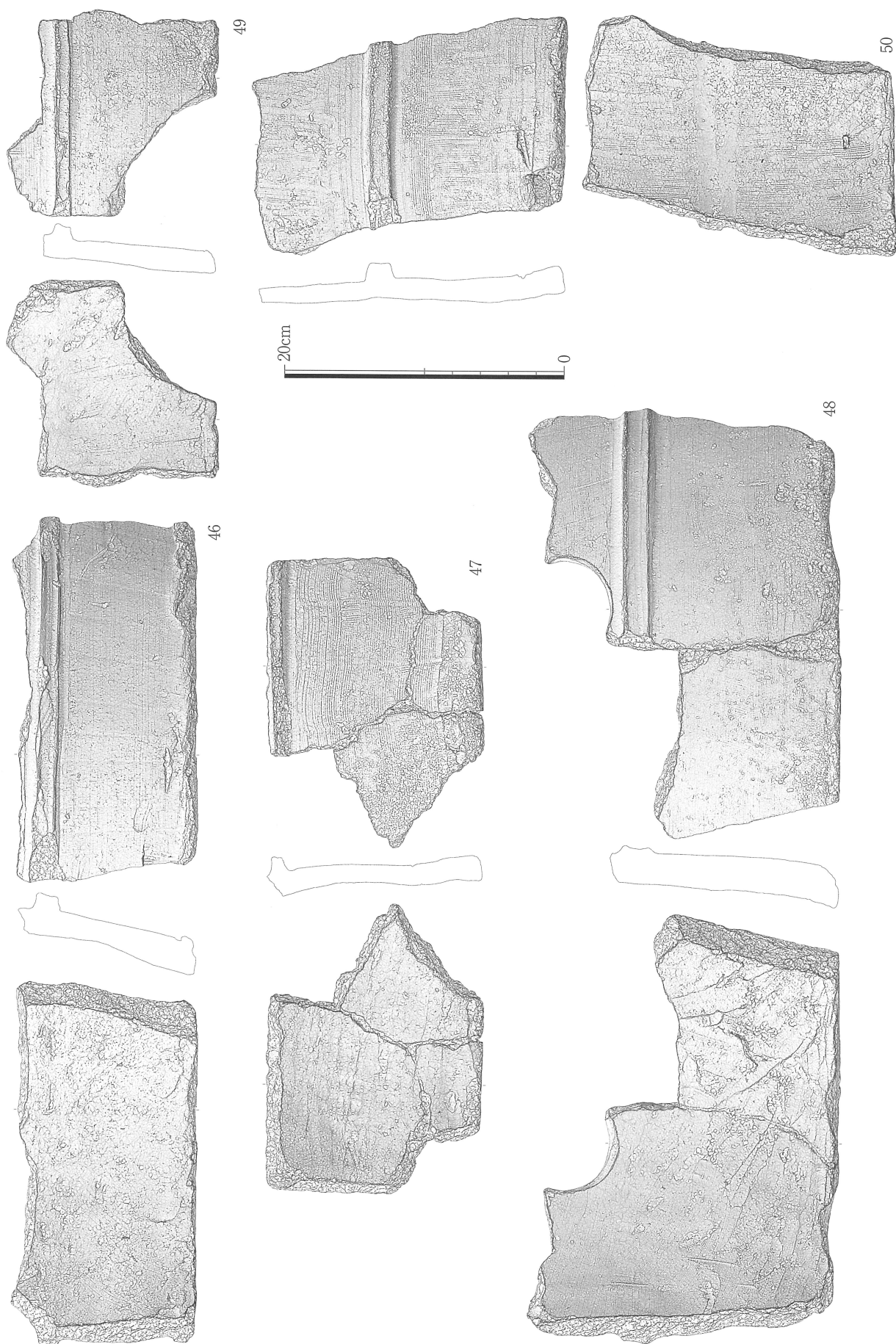
第23図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(3) 円筒底部1 (1/4)



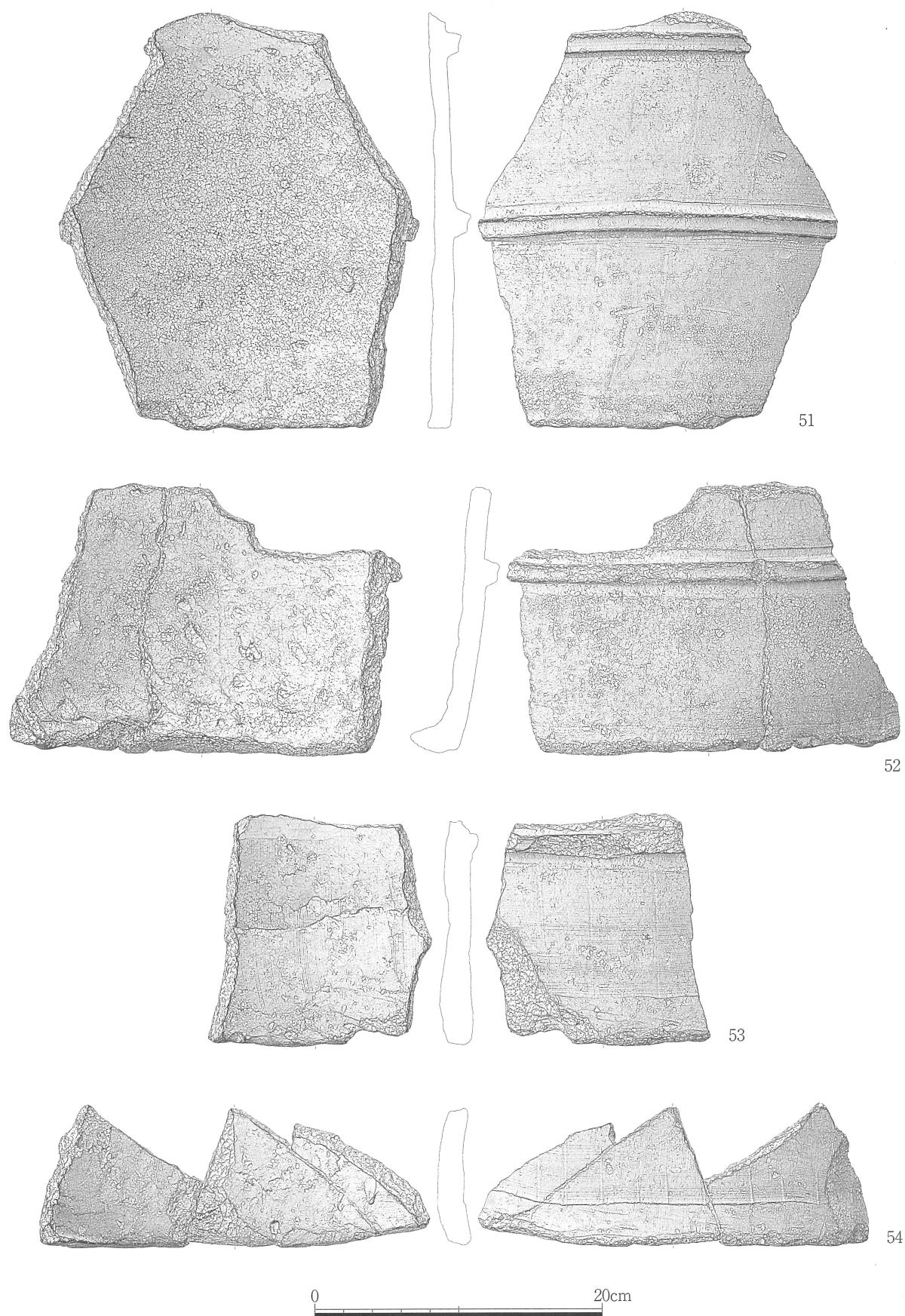
第24図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(4) 円筒底部2(1/4)



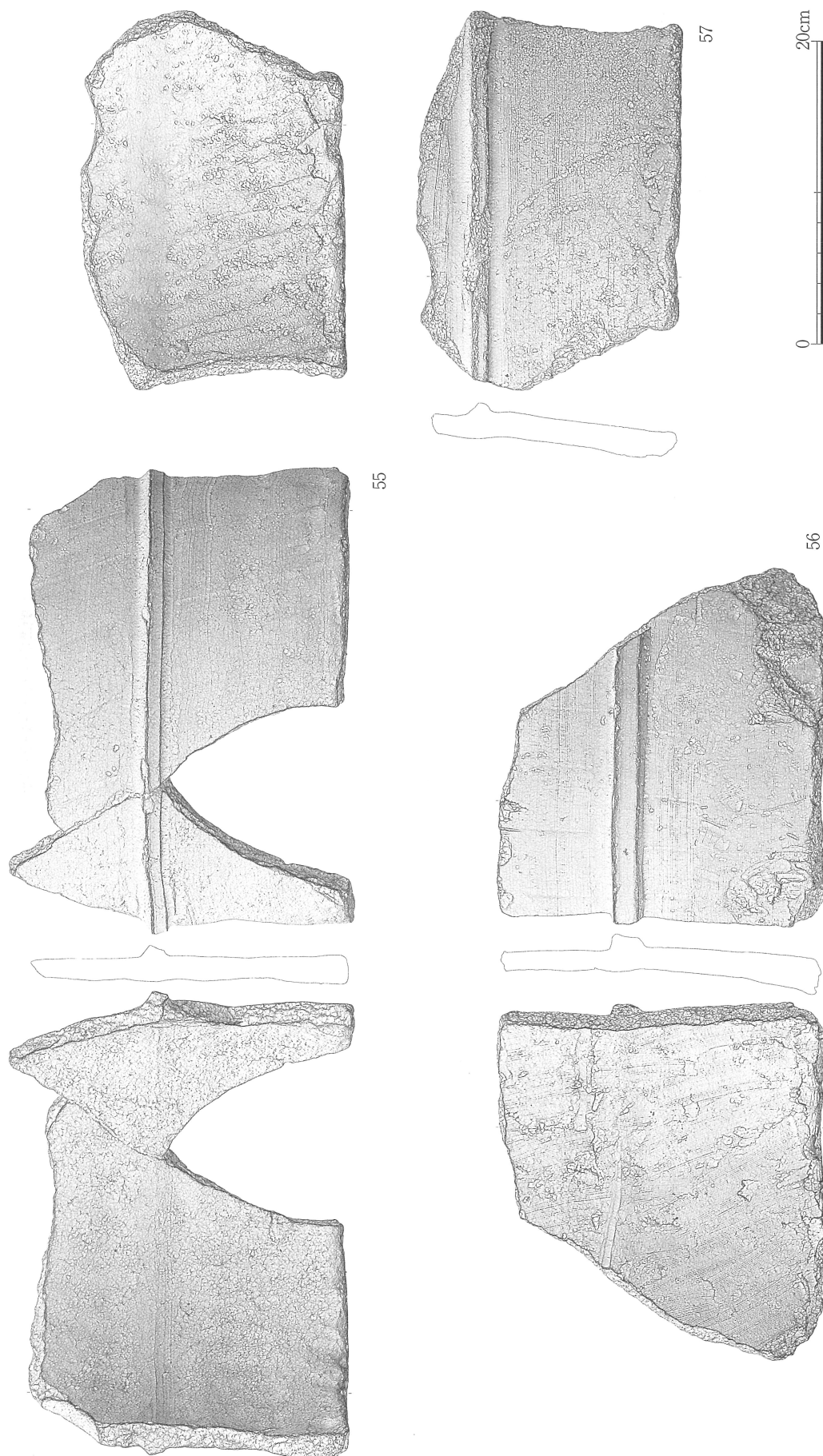
第25図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図（5）円筒底部3（1/4）



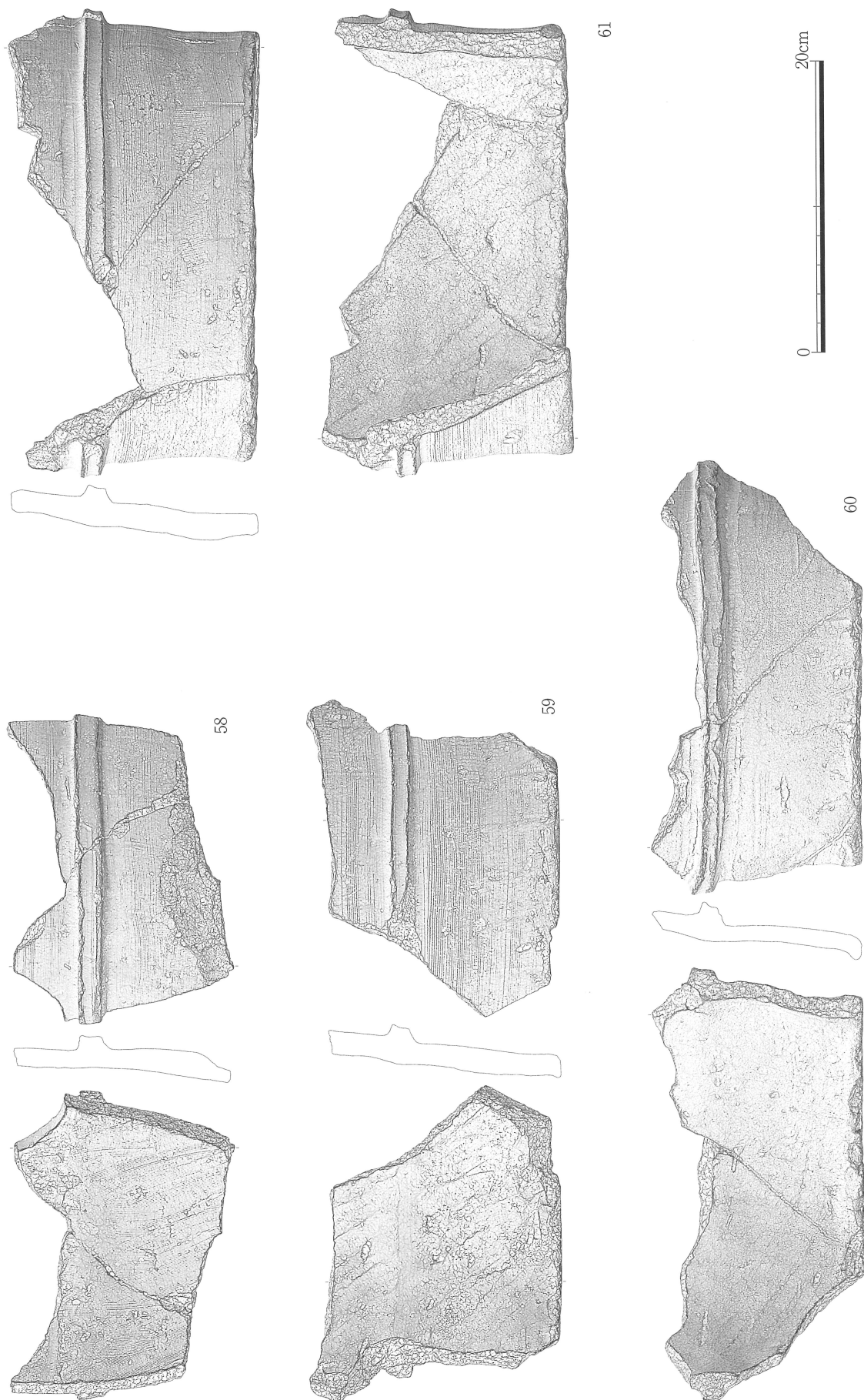
第26図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図（6）円筒底部4（1/4）



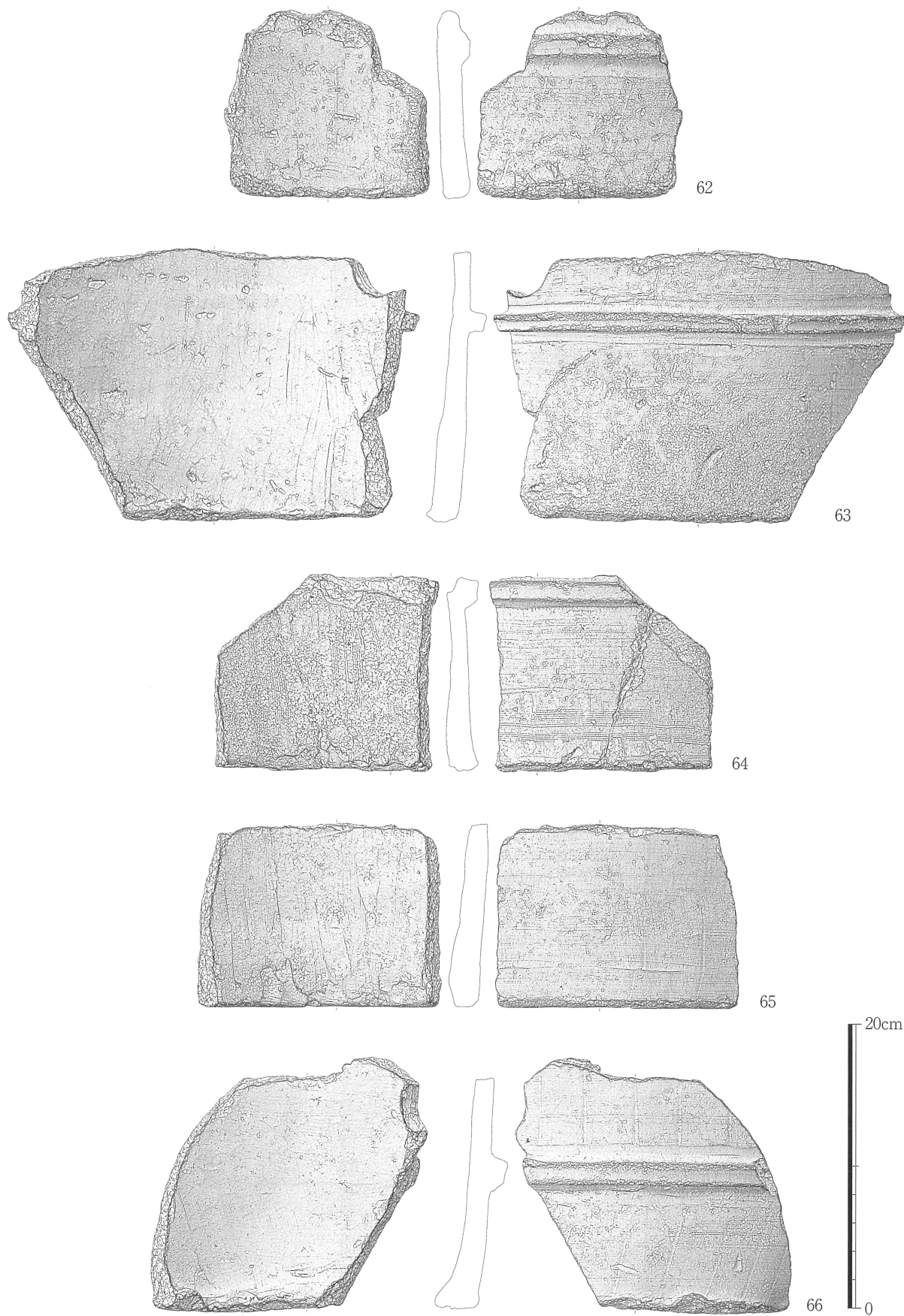
第 27 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図（7）円筒底部 5（1/4）



第28図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図（8）円筒底部6（1/4）



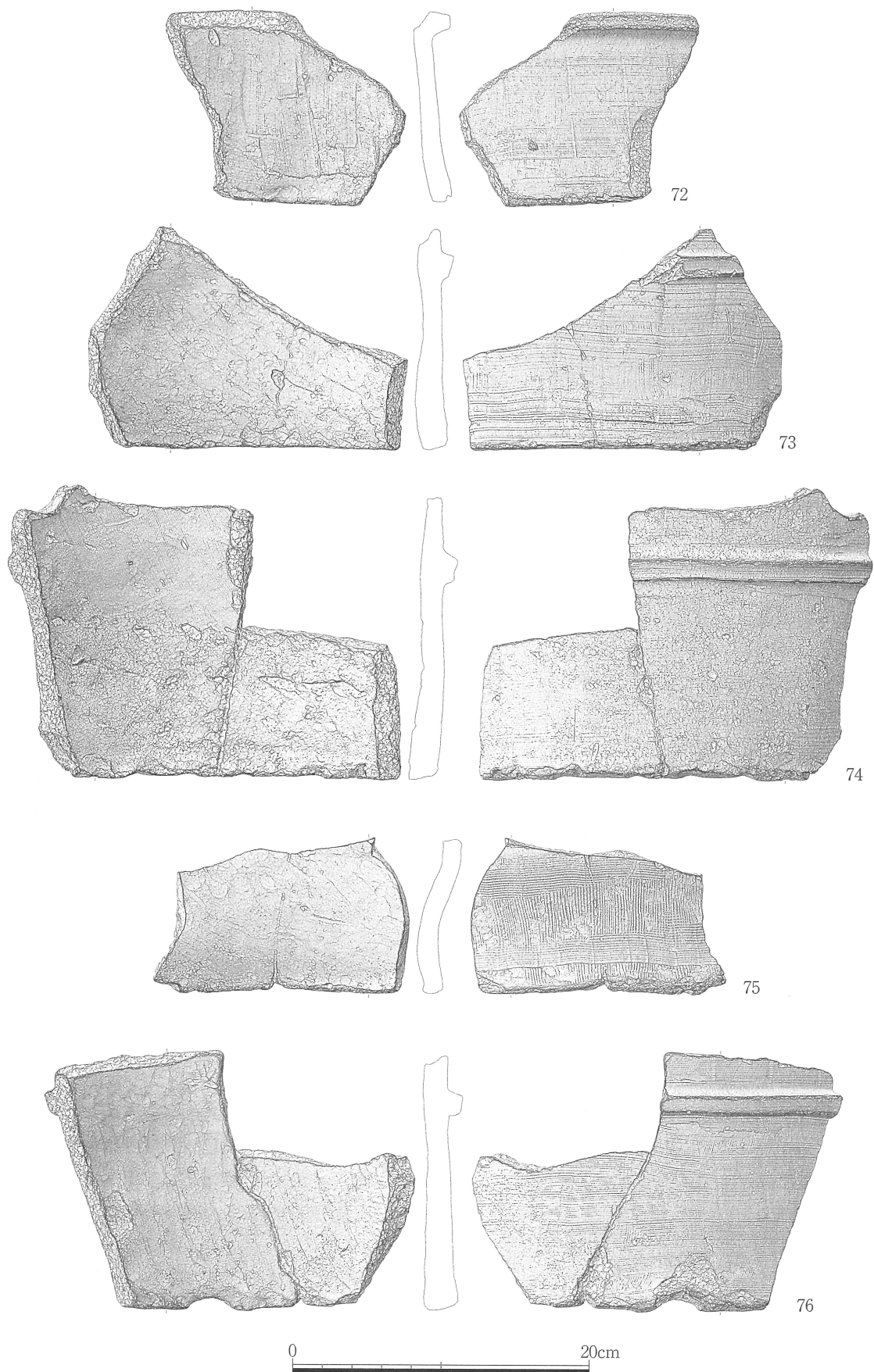
第29図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (9) 円筒底部7 (1/4)



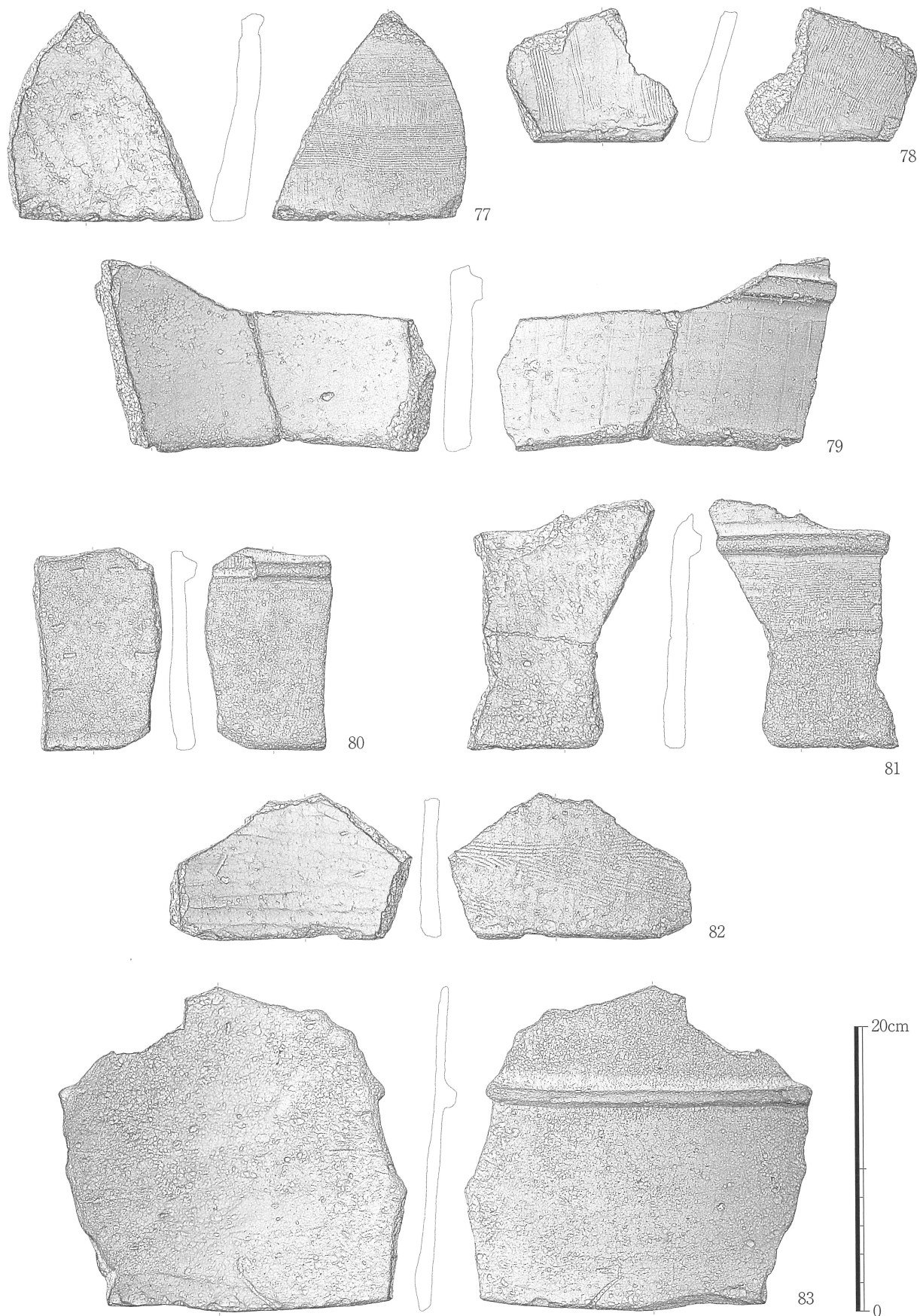
第30図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(10) 円筒底部8(1/4)



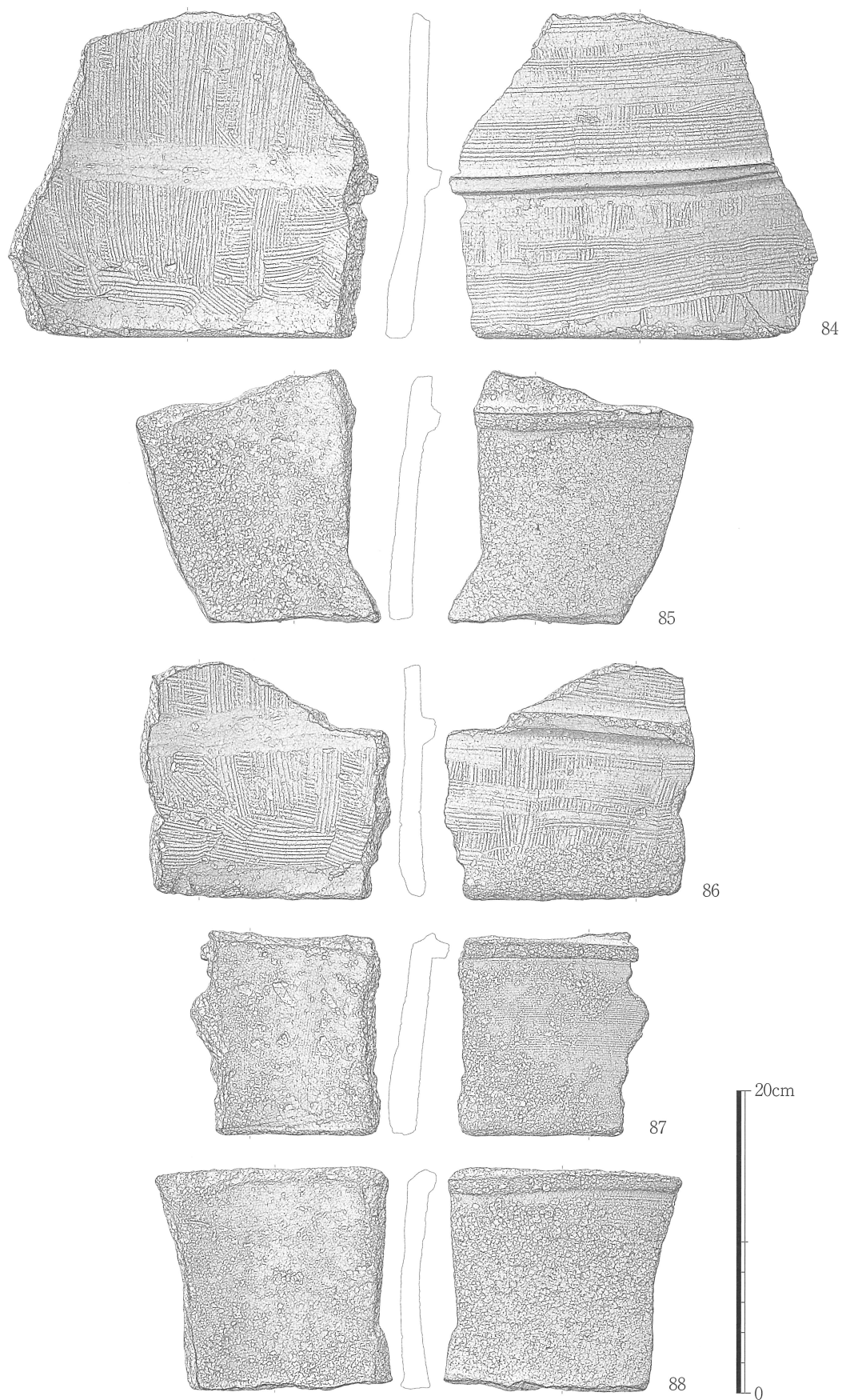
第31図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (11) 円筒底部9 (1/4)



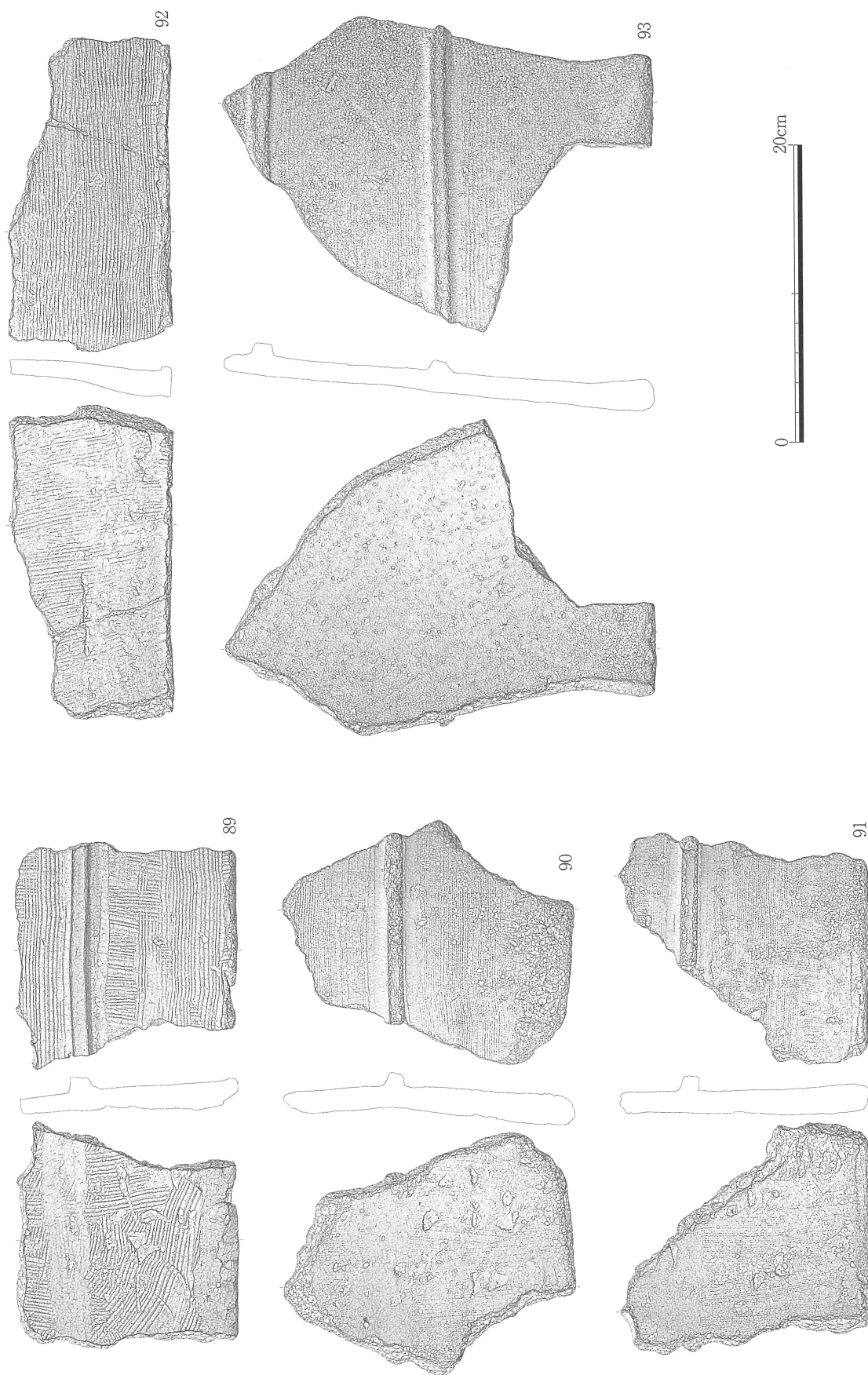
第 32 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (12) 円筒底部 10 (1/4)



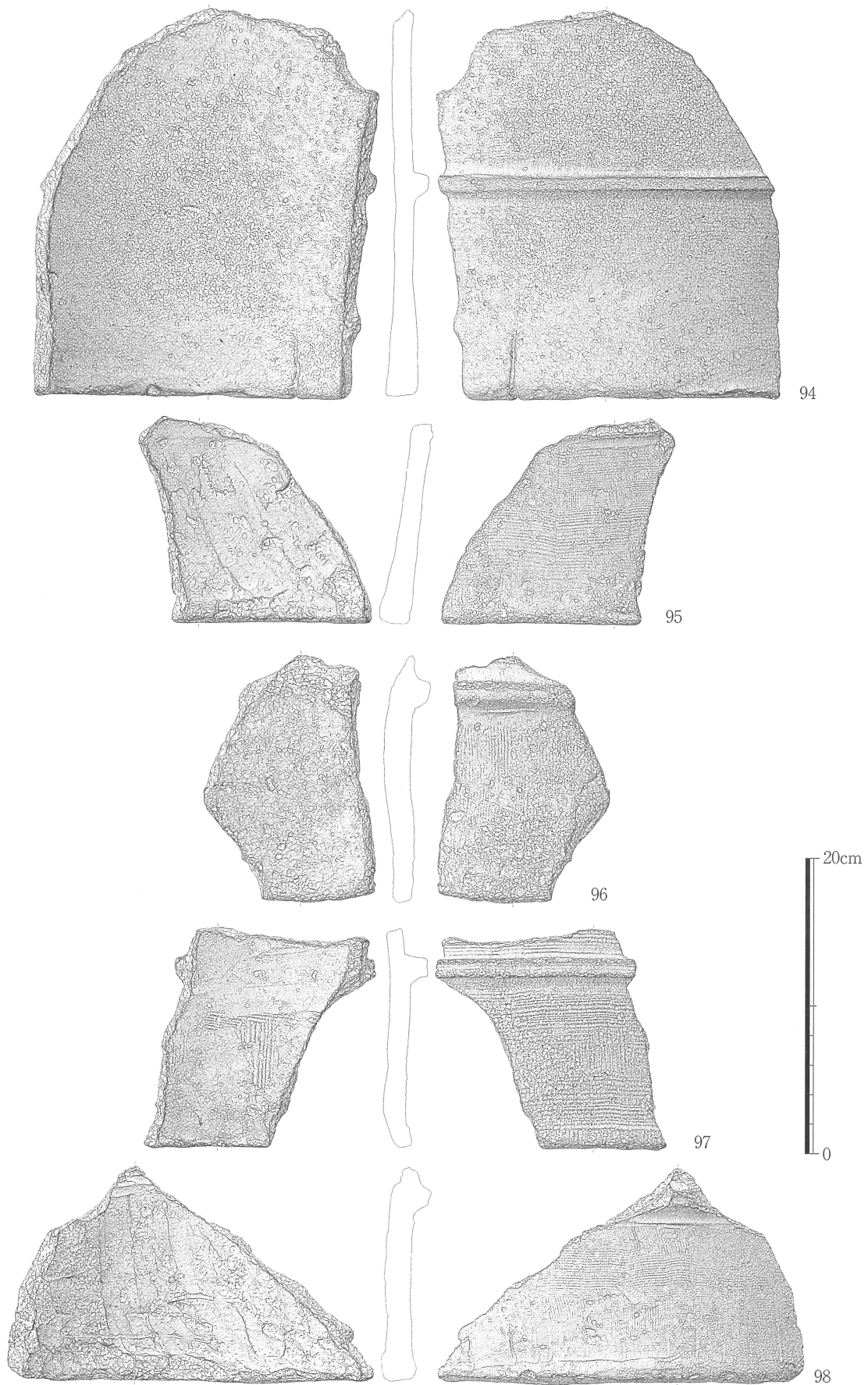
第 33 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (13) 円筒底部 11 (1/4)



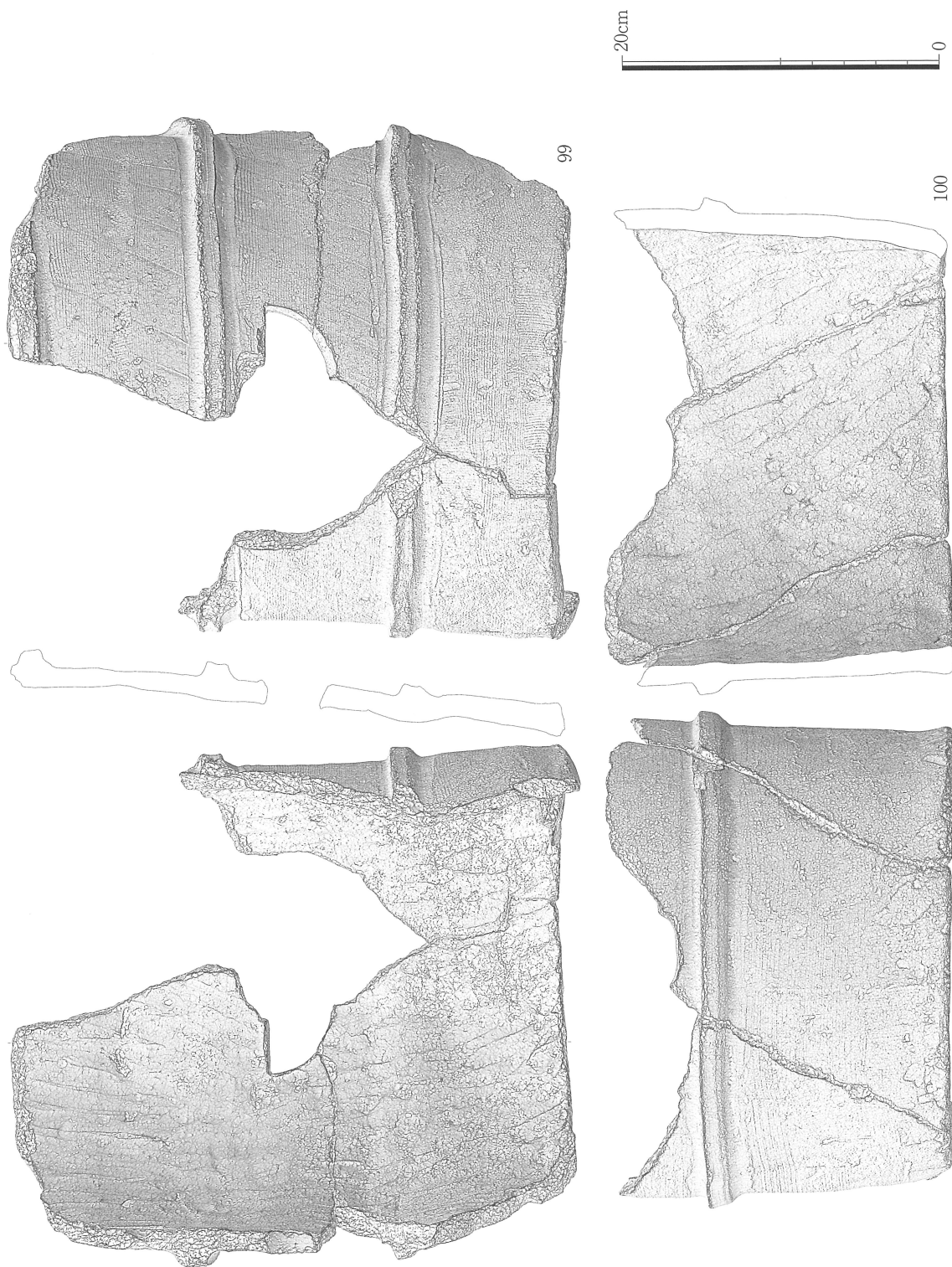
第34図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(14) 円筒底部12(1/4)



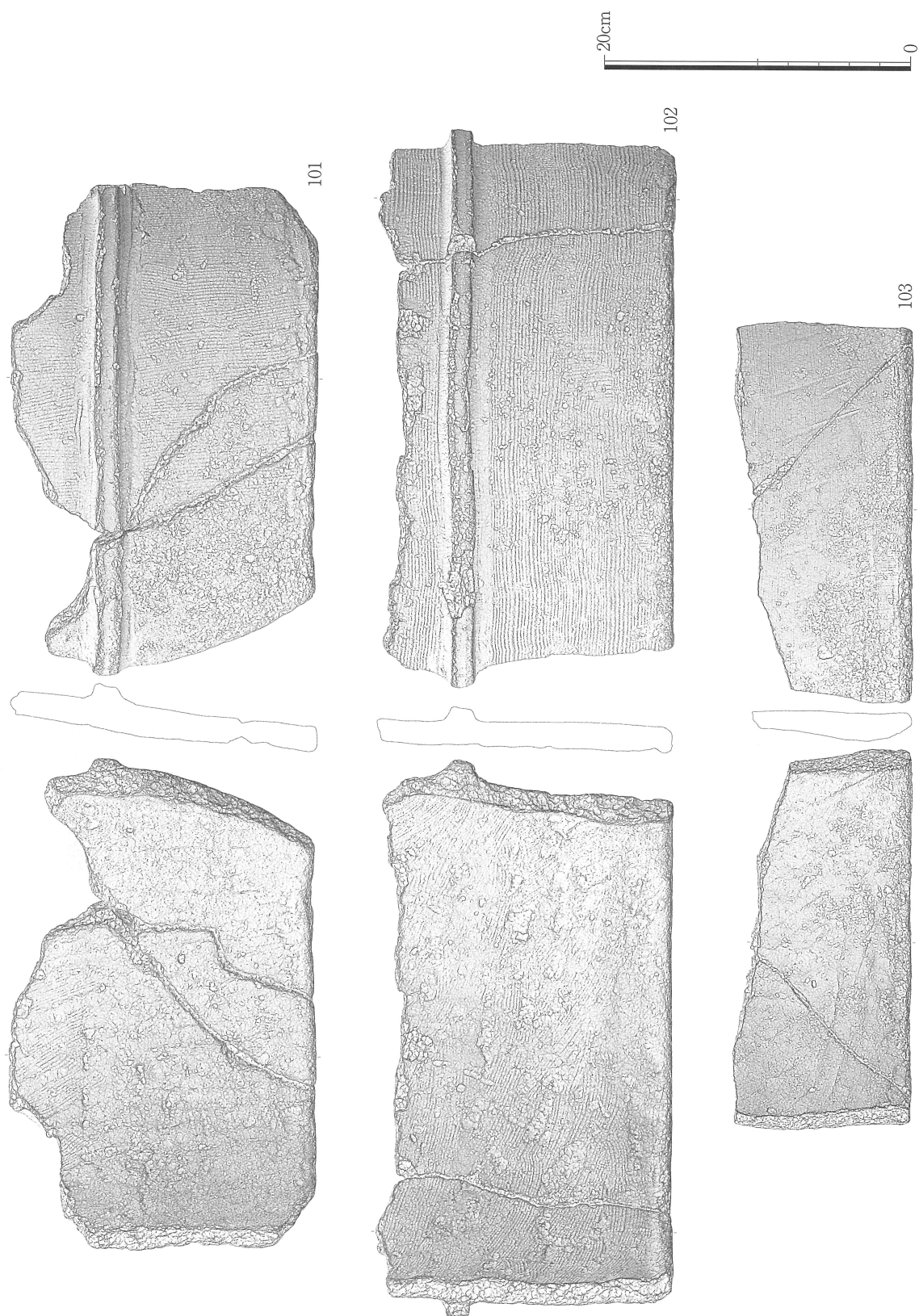
第35図 宇和奈辺陵墓参考地 採集植輪三次元計測図 (15) 円筒底部 13 (1/4)



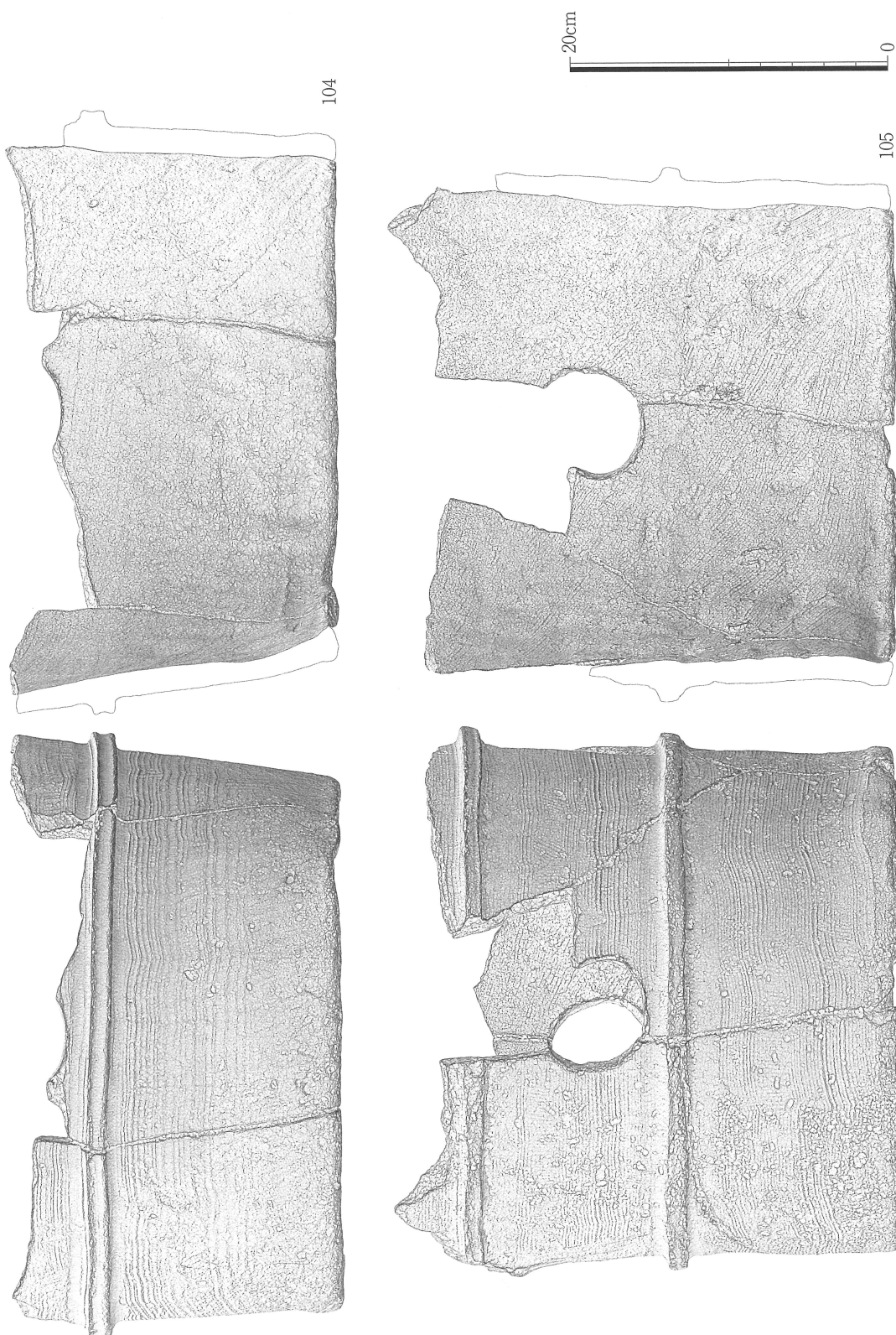
第 36 図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (16) 円筒底部 14 (1/4)



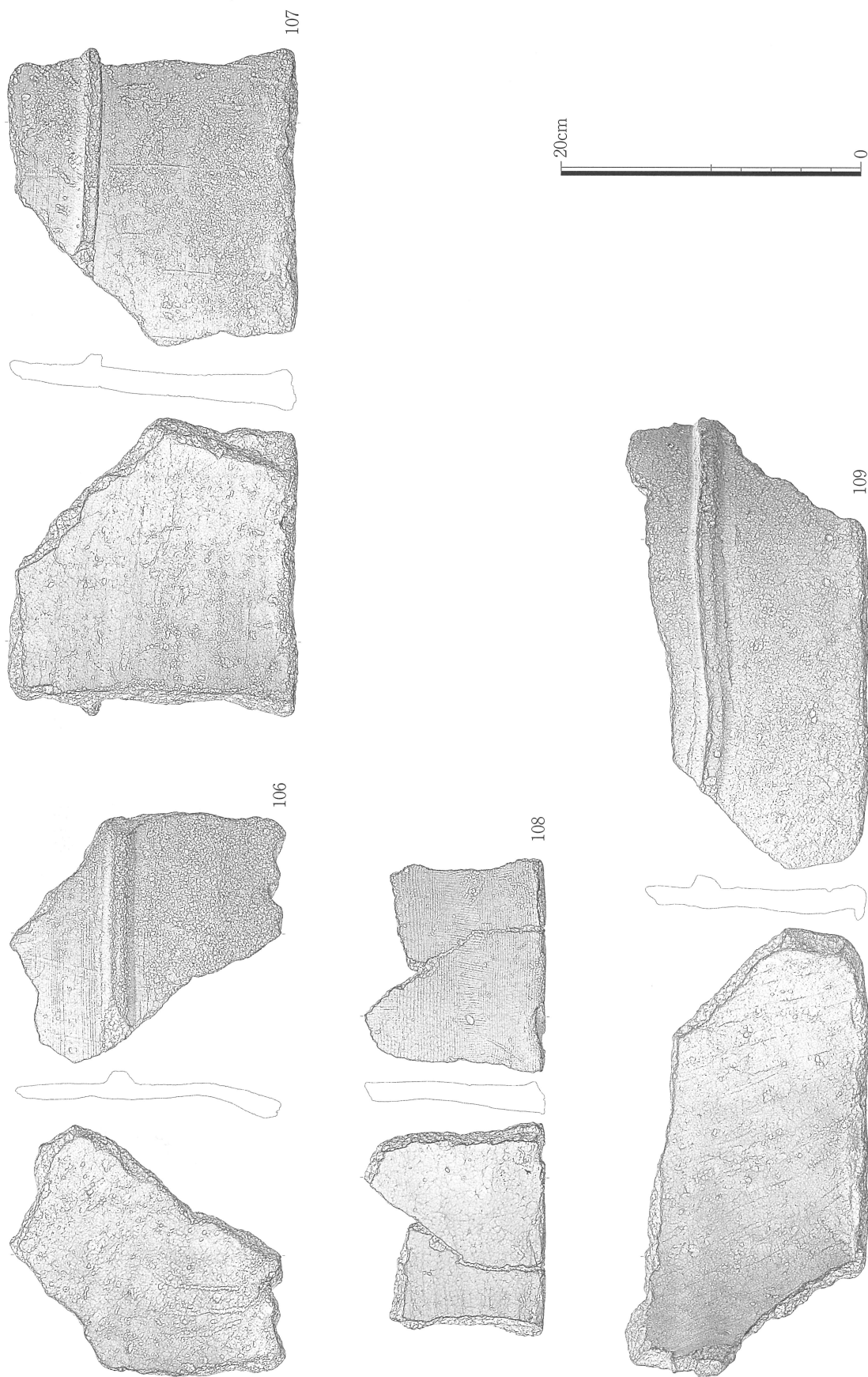
第37図 宇和奈辺陵墓参考地 採集直輪三次元計測図 (17) 円筒底部15 (1/4)



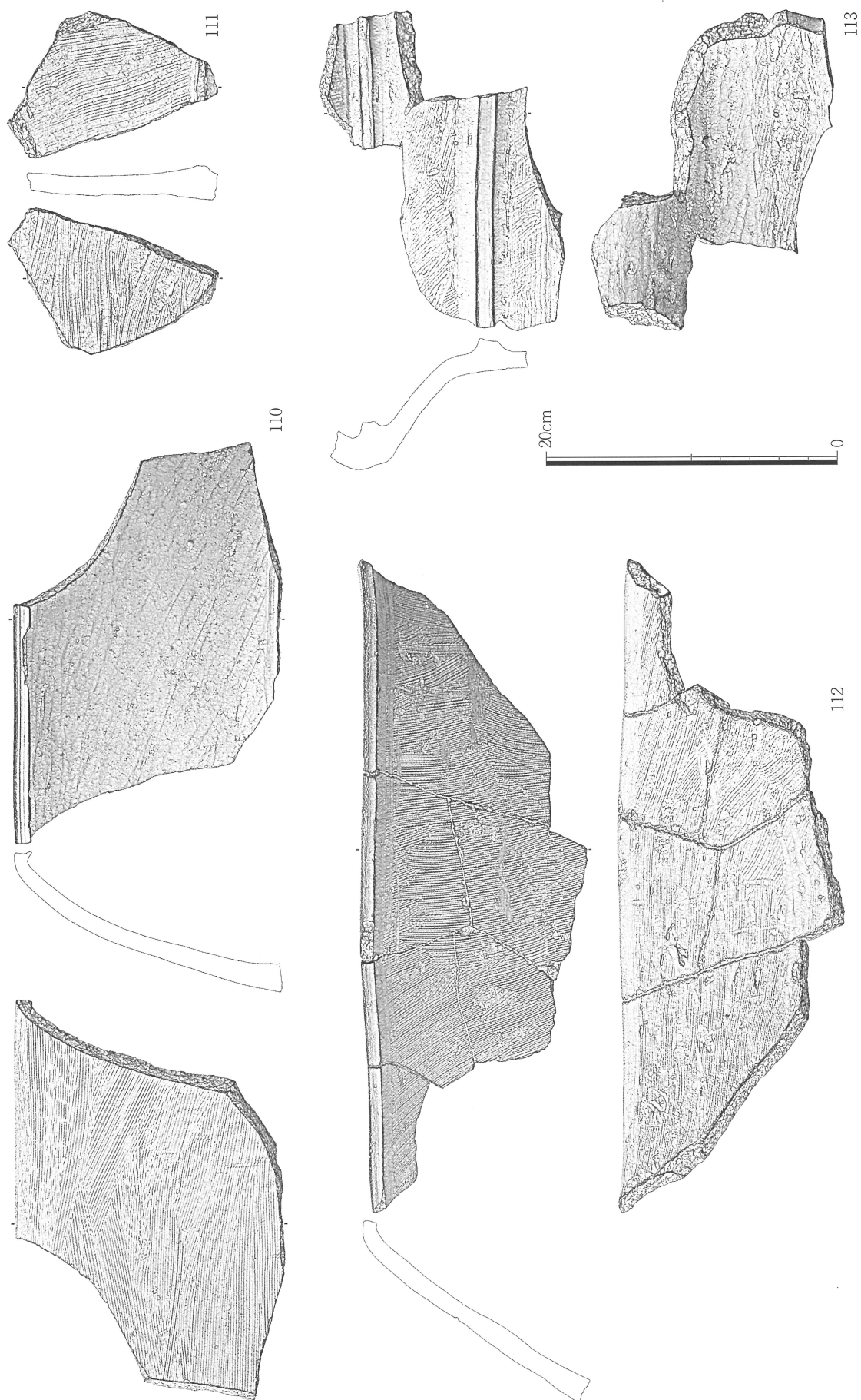
第38図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (18) 円筒底部 16 (1/4)



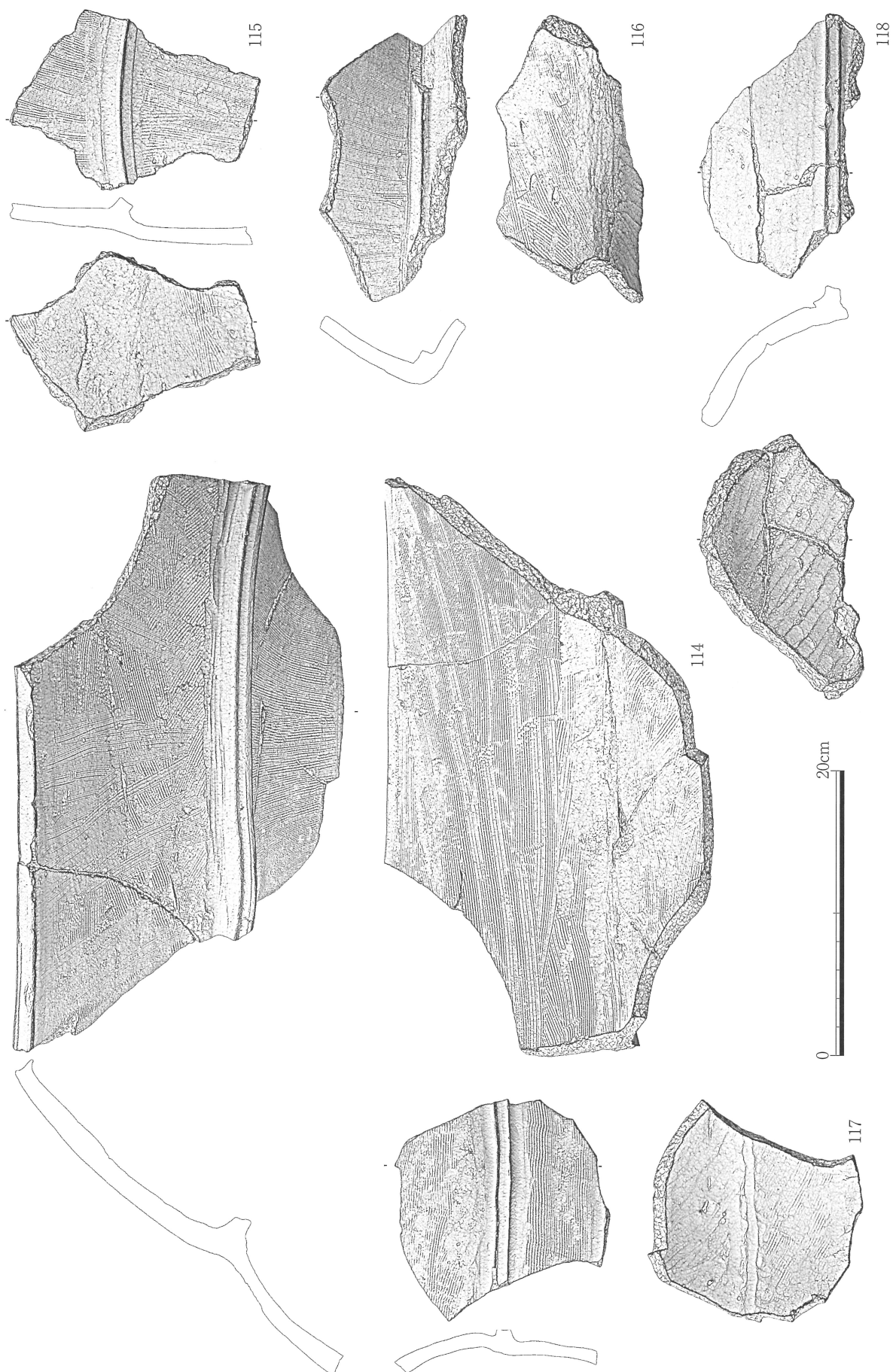
第39図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (19) 円筒底部 17 (1/4)



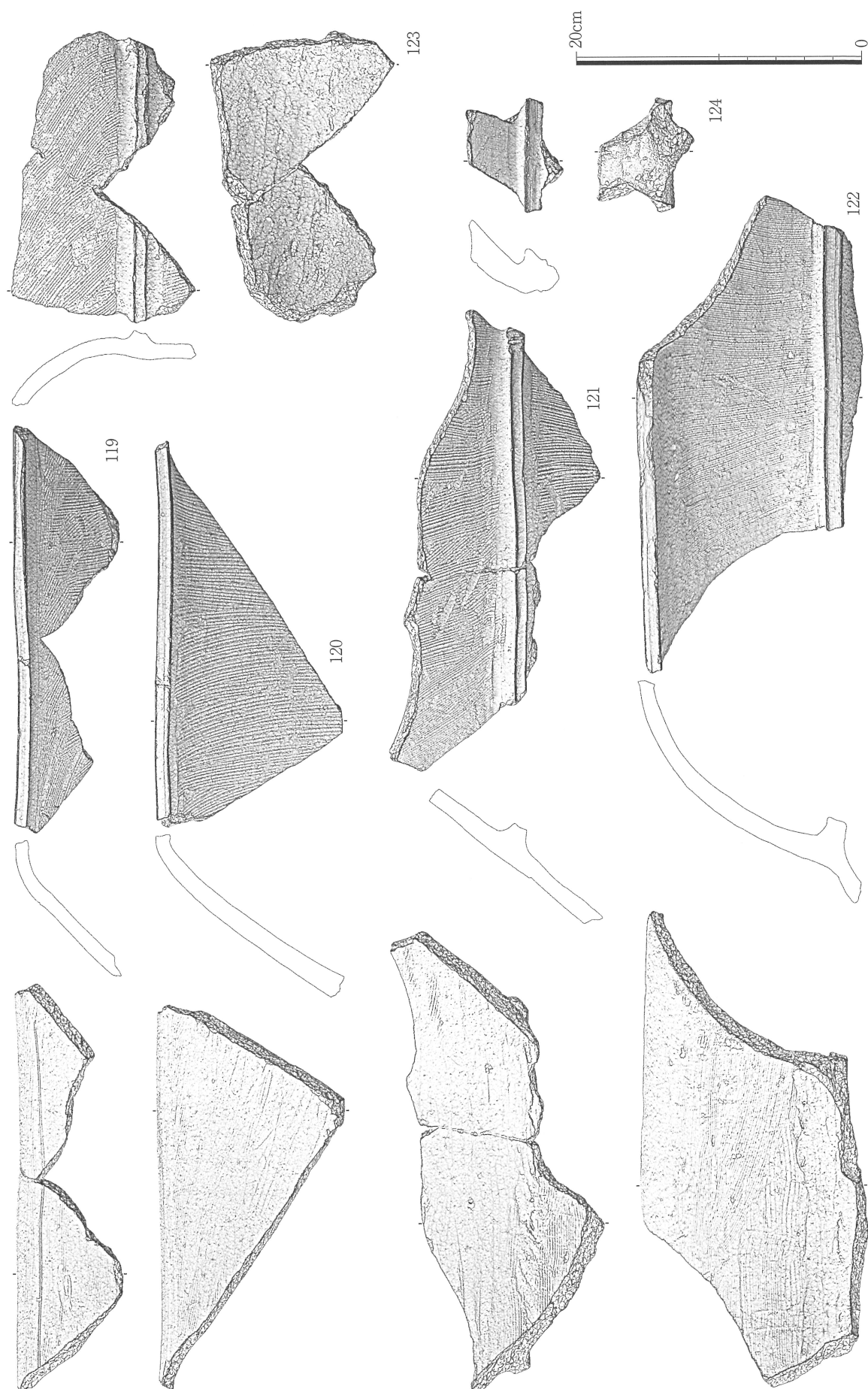
第40図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (20) 円筒底部 18 (1/4)



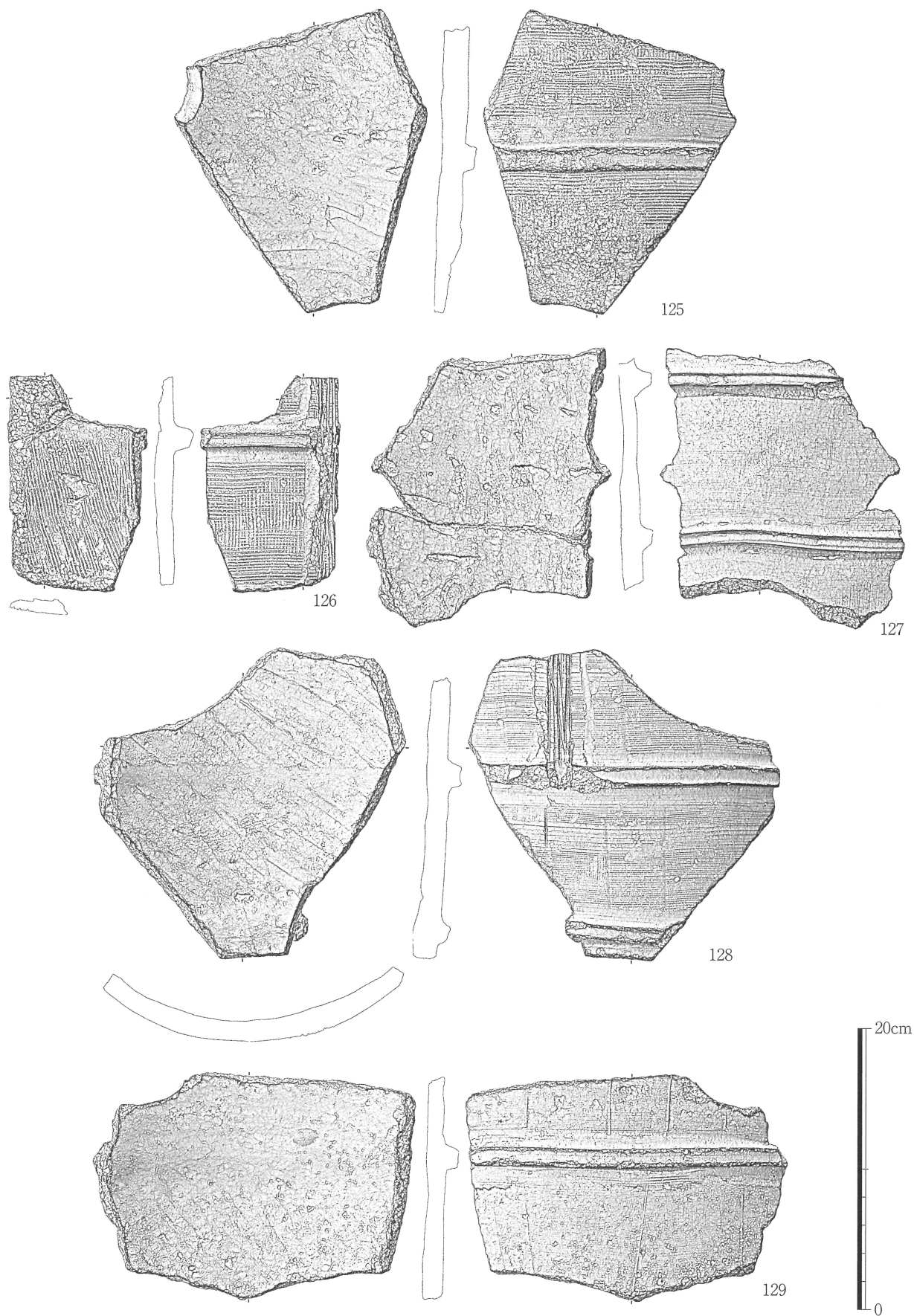
第41図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (21) 朝顔型 埴輪口縁部1 (1/4)



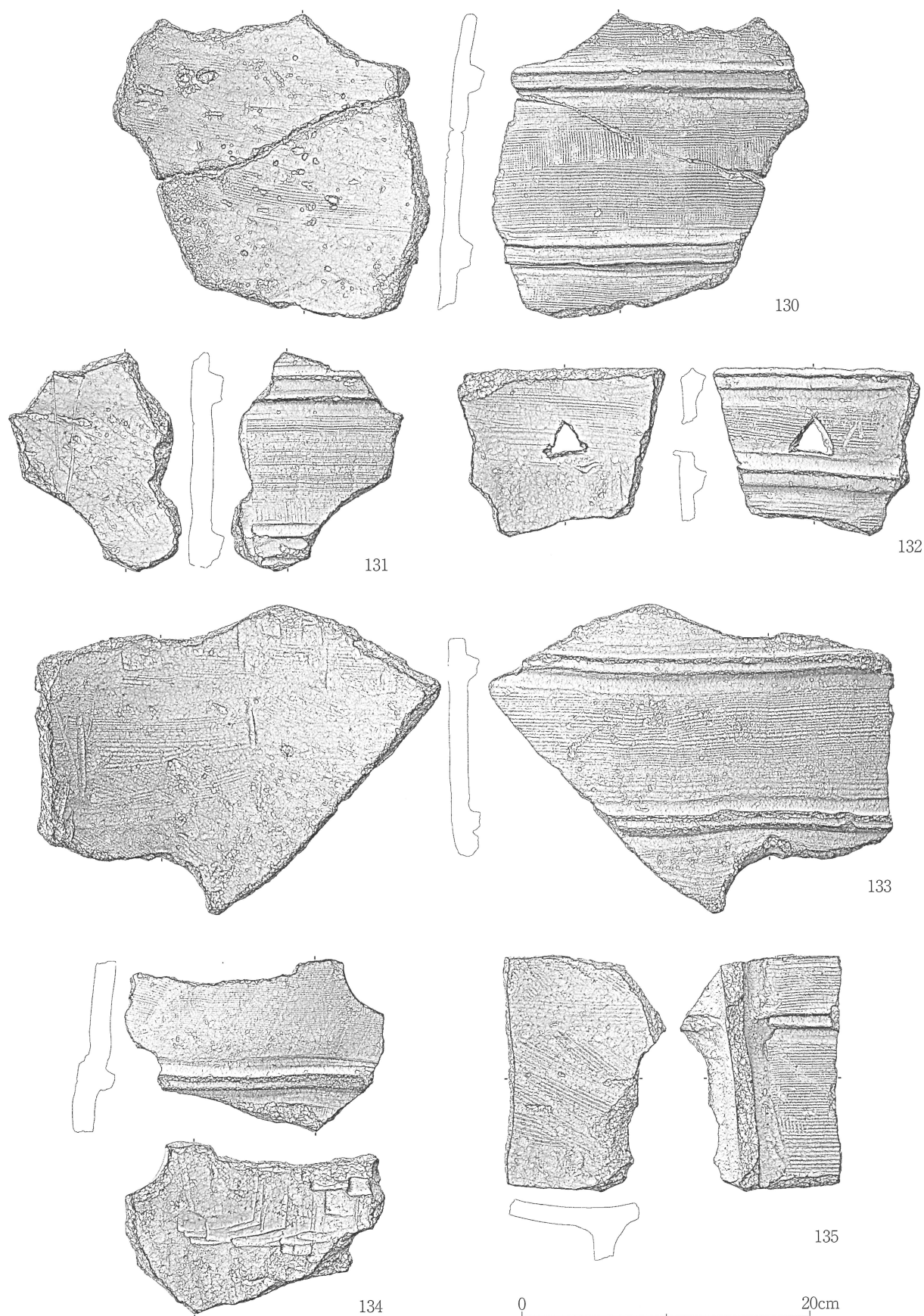
第42図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (22) 朝顔形埴輪口縁部2 (1/4)



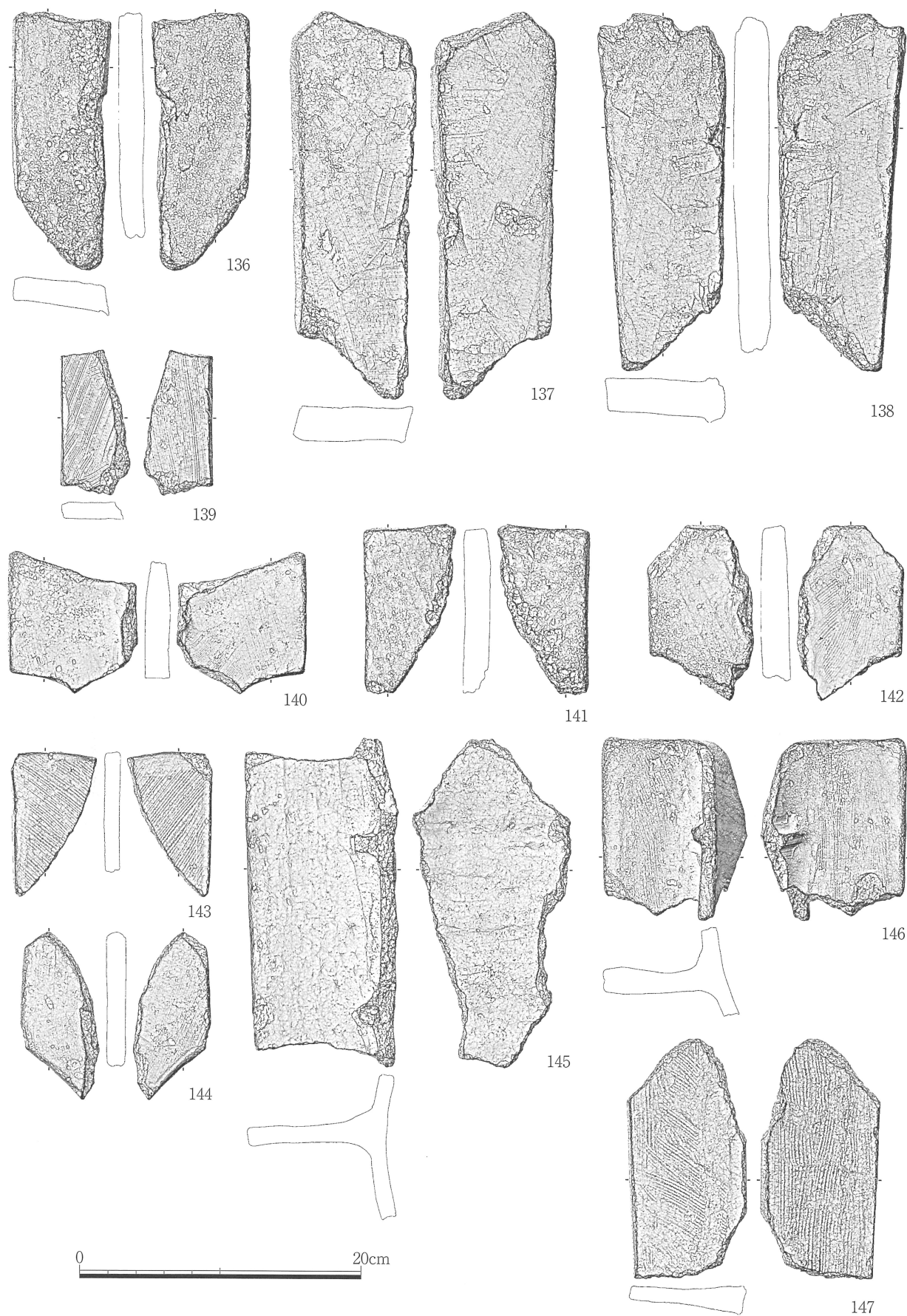
第43図 宇和奈辺陵墓参考地 採集植輪三次元計測図 (23) 朝顔形植輪口縁部3 (1/4)



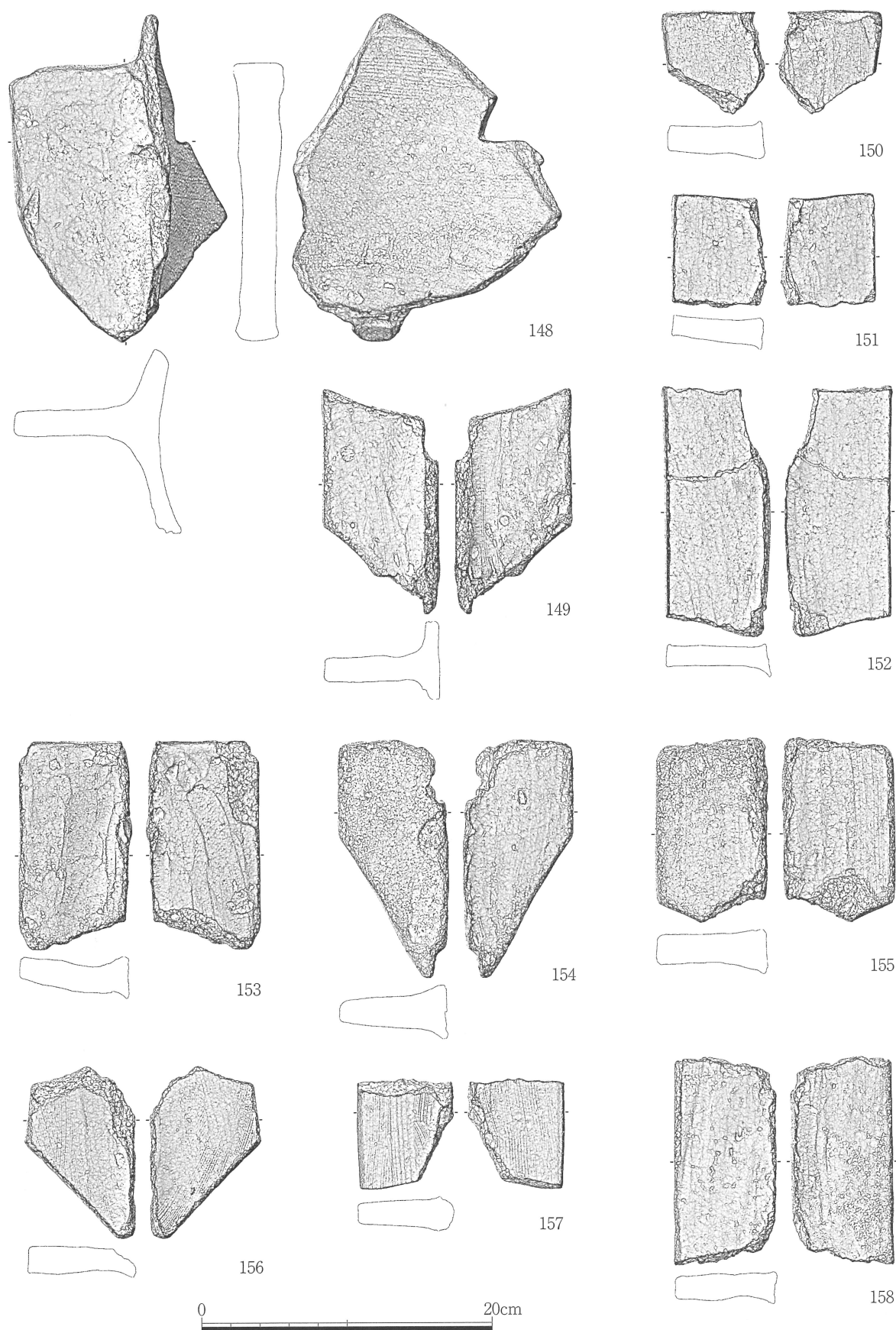
第44図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(24) 円筒胴部1(1/4)



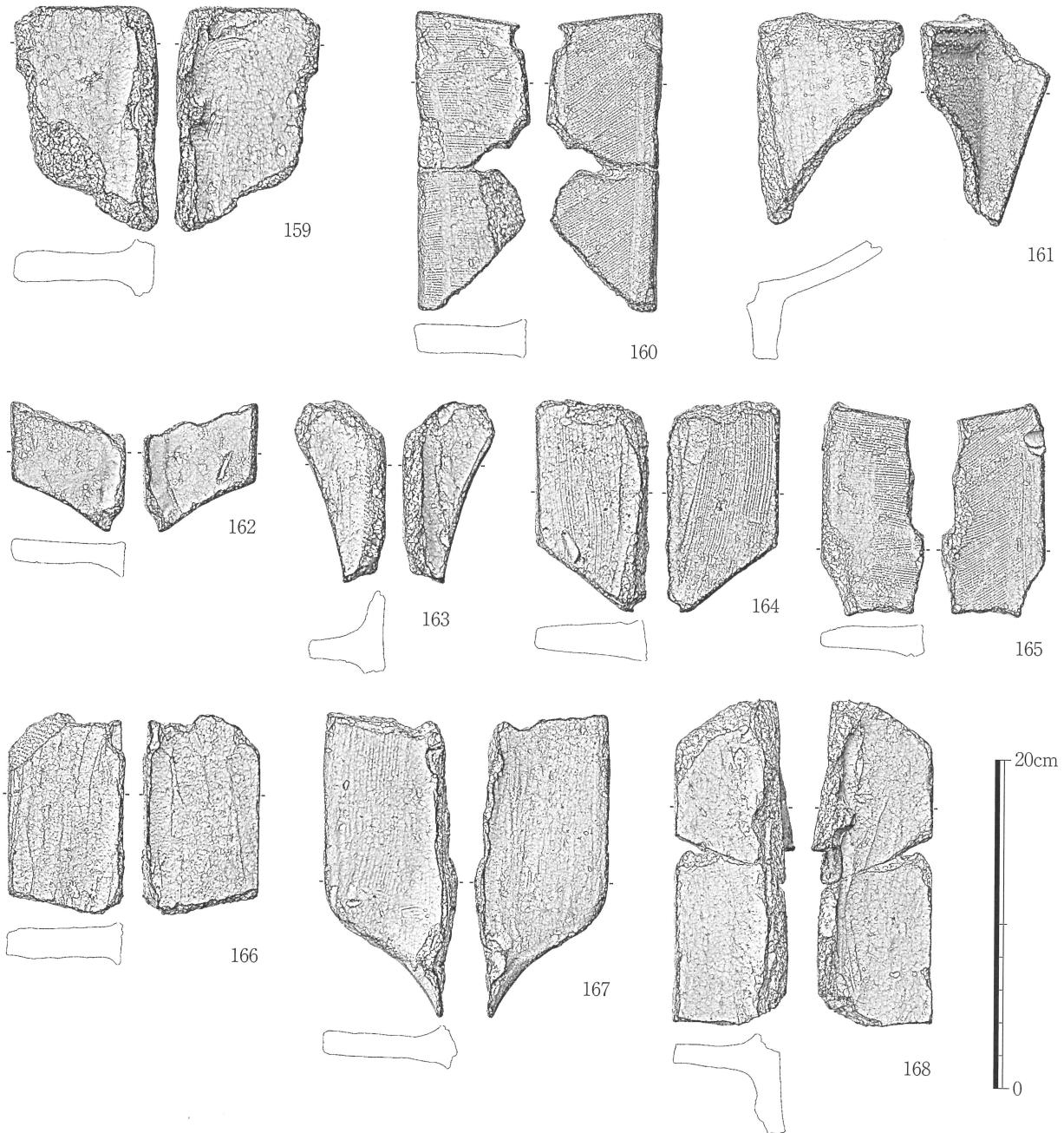
第45図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(25) 円筒胴部2(1/4)



第46図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (26) 罎1 (1/4)



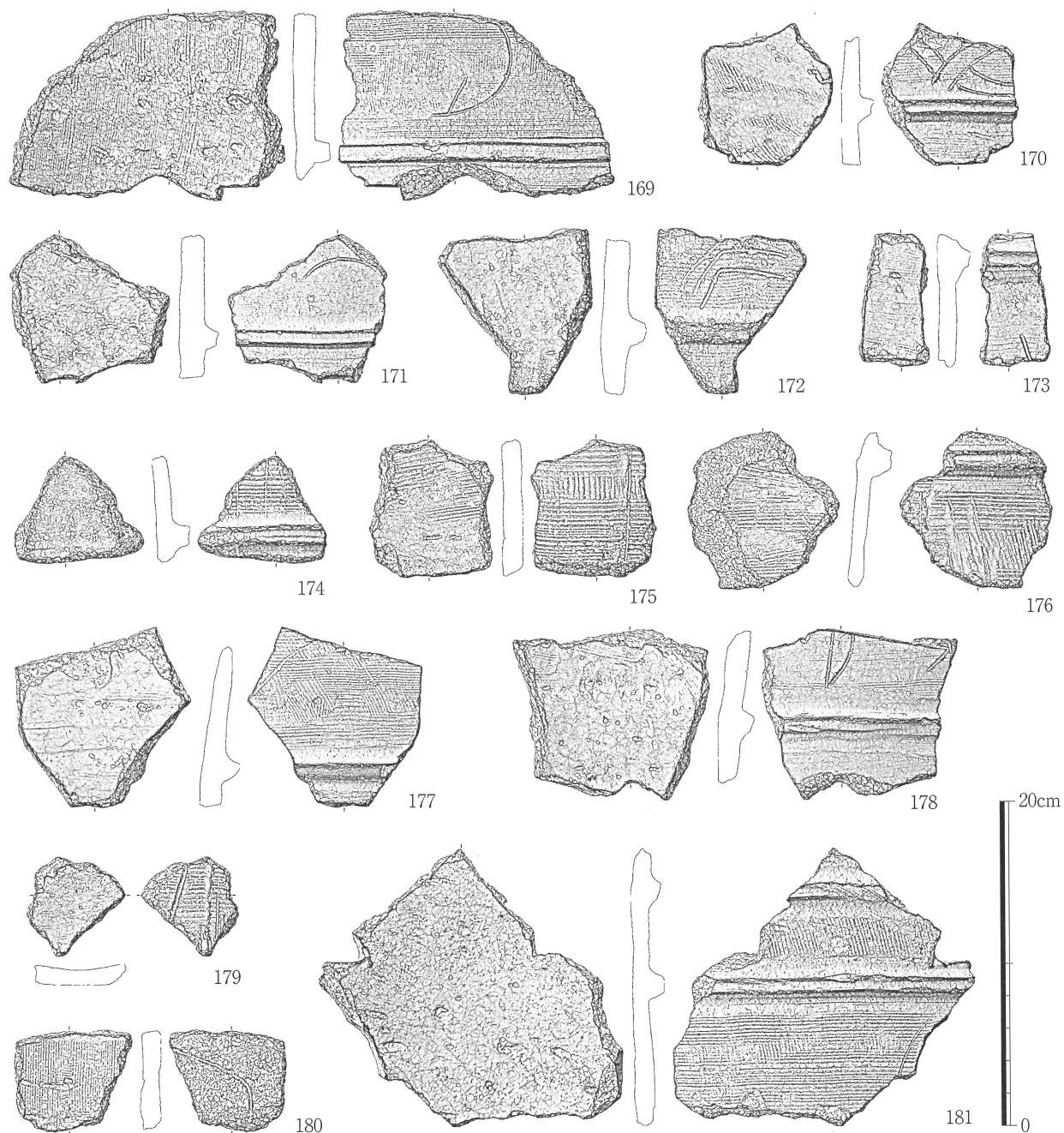
第47図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (27) 鱗2 (1/4)



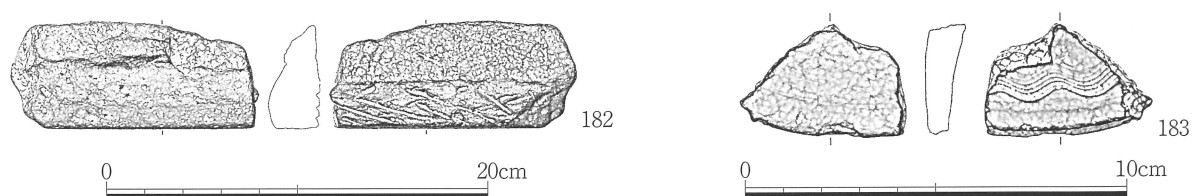
第48図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図(28) 罎3(1/4)

情報が十分に伝わらない部分があることも避けられない。どのように報告書内で生かすかを模索していく必要があるが、資料を細かく検討していく過程では、得られた情報が有効に活用できることは容易に想像できることから、報告作成の作業段階、作業結果の提示など色々な側面での活用が考えられる。

今後の課題としては、今回は資料の提示を主眼としたため、各破片どうしの個体としてのつながりまで十分に確認が取れていない。また、これまでの資料にどの程度新たな知見が加えられるのか、十分に整理ができていない。まずは、個体ごとのまとまりを見出して、器種認定につなげる作業を行う必要がある。そのうえで、当参考地に配列された埴輪については、墳丘部における当庁の所蔵資料だけでなく、これまでにも中堤上などの原位置で出土している奈良国立文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所や奈良市教育委員会による調査での資料や造出周辺での採集資料があることから⁽⁷⁾、それらとの比較検討を行うことで、何らかの傾向が見出せるのか考えていく必要もあろう。



第49図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (29) 線刻のある埴輪 (1/4)



第50図 宇和奈辺陵墓参考地 採集埴輪三次元計測図 (30) 形象埴輪・須恵器 (1/4・1/2)

今回の報告が、学界において少しでも利用できる場所があれば幸いである。

(清喜・田中)

註

- (1) 清喜裕二・有馬 伸・横田真吾「宇和奈辺陵墓参考地整備工事予定区域事前調査」『書陵部紀要』第73号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2022年。
- (2) 奈良県立橿原考古学研究所(編)「ウワナベ古墳」『奈良県遺跡調査概報(第1分冊)2021年度』、奈良県立橿原考古学研究所、2022年。
- (3) 村瀬 陸・柴原聡一郎「ウワナベ古墳の調査 UN第2次」『奈良市埋蔵文化財調査年報 令和2(2020)年度』奈良市教育委員会、2023年。
- (4) 註(3)文献。当参考地前方部東隅で採集された須恵器無蓋高坏については、既に、奈良市により採集された破片との接合が確認されている。
- (5) 土生田純之・清喜裕二・加藤一郎「宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について」『書陵部紀要』第57号、宮内庁書陵部、2006年。
- (6) 清喜裕二・加藤一郎「平成29年度 墳丘外表面調査の成果報告—宇和奈辺陵墓参考地—」『書陵部紀要』第70号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2019年。
- (7) 町田 章(編)『平城宮発掘調査報告 VI』、奈良国立文化財研究所、1975年。
鐘方正樹・角南聡一郎「籠目土器と笱形土製品」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1997』、奈良市教育委員会、1998年。
大澤正吾「ウワナベ古墳造出裾周辺採集の埴輪」『奈良文化財研究所紀要2018』、奈良文化財研究所、2018年。
松永悦枝「ウワナベ古墳造出裾採集の須恵器・土製模造品」『奈良文化財研究所紀要2020』、奈良文化財研究所、2020年。
大澤正吾『ウワナベ古墳出土埴輪図録—平城第60次調査L区 中堤外周埴輪列—』、奈良文化財研究所、2022年。



1 円筒埴輪口縁部（左上から 2、5、9、18）



2 円筒埴輪口縁部（24、25）



1 円筒底部 (43)



2 円筒底部 (55)



1 円筒底部 (69)



2 円筒底部 (74)



1 円筒底部 (76)



2 円筒底部 (79)



1 円筒底部 (99)



2 円筒底部 (100)



1 円筒底部 (102)



2 円筒底部 (105)



1 朝顔形埴輪口縁部 (114)



2 朝顔形埴輪口縁部 (122)



1 朝顔形埴輪肩部 (117)



2 朝顔形埴輪肩部 (123)



1 円筒胴部 (125、126)



2 円筒胴部 (128、129)



1 円筒胴部 (130、132)



2 円筒胴部 (134、135)



1 鱗 (137、139、140、147)



2 鱗 (154、160、165、167)



1 線刻のある埴輪（左上から 169、170、171、172、178）



2 形象埴輪・須恵器（182、183）